

創世記1 創世記1章1節

「初めに」

イントロ：

1. 創世記を始める。きょうのアウトライン。
 - (1) 前半で、創世記の概観を提示する。
 - (2) 後半で、創世記1章1節を解説する。
2. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるか。
 - (1) クリスマンになる前の私の人生観、世界観。
 - (2) 今日の日本人に見られる宗教軽視の傾向。神に関するマイナスイメージ。
 - (3) 混乱した現代思想を整理・矯正してくれる書。

創世記1章1節は、私たちの人生観を変える。

I. 創世記の概観 (イントロダクション)

1. 名称

- (1) ヘブル語名は、「ベレシート (初めに)」。
- (2) 英語名は「Genesis」。七十人訳が採用した「Geneseos (経緯)」から出たもの。
- (3) 日本語名
 - ①「Geneseos (経緯)」を背景とする。
 - ②古代にユダヤ人が採用していた「世界の創造の書」に近いものとなっている。
- (4) 本書の内容を表す言葉としては、「ベレシート (初めに)」が最適。

2. 著者

- (1) 伝統的にモーセだとされている。
- (2) 厳密には、モーセが編集者としてこの書をまとめたと言うべき。
- (3) 出エジプト記～申命記は、モーセ自身が目撃者。
- (4) 創世記においては、編集者となった。
 - ①11種類の文書(家系に伝わる口伝情報や文書化された情報)の存在。
 - ②それらをまとめ、編集した。
- (5) 聖書は、旧約聖書の最初の五書はモーセが書いたと教えている。

3. 内容

- (1) ものごとの始まりを記した書である。
- ①宇宙の始まり
 - ②地球の始まり
 - ③命の始まり
 - ④人類の始まり
 - ⑤結婚の始まり
 - ⑥人類史上における罪の始まり
 - ⑦各種言語の始まり
 - ⑧諸国民の始まり
 - ⑨イスラエルの民の始まり
 - ⑩神と人類の契約の始まり (8つの契約の内4つまでが創世記に出てくる)
 - ⑪人類の救いの始まり

4. 区分

- (1) 前半が1:1～11:9
- ①2000年以上の期間をカバー。
 - ②全人類に関わる内容。
- (2) 後半が11:10～50:26
- ①193年の期間をカバー。
 - ②イスラエルの民に焦点が絞られている。

5. 創世記と科学

- (1) 創世記は、科学的な文書ではない。
- (2) しかし、証明されている科学的理論と創世記の記述とが矛盾している点は、全くない。
- (3) 特に問題になるのは進化論と創世記の関係であるが、進化論は科学的仮説。

6. 目的

- (1) 神がどのようなお方であることを教えている。
- (2) イスラエルの民の選びに関する神学的理由を明示している。
- (3) この書によって、神への信頼を深め、救いの素晴らしさを確認する。

II. 創世記1章1節

1. 「初めに (ベレシート)」

- (1) 宇宙の始まりを記した言葉。
- (2) それがいつであったかを教えているわけではない。
- (3) 創世記1：1の「初めに」と、ヨハネ1：1の「初めに」との比較
 - ①ヨハネ1：1の方が時間的には先になる。
 - ②「ことば」は、被造の世界ができる前から存在していた。神は時間を超越したお方。

2. 「創造した (バラ)」

- (1) この言葉は、神に対してのみ適用される動詞 (創世記1：21、27 参照)。
- (2) 無からの創造であっても、有からの創造であっても、「バラ」という動詞が使われる。
- (3) この箇所では、「バラ」という動詞は、無からの創造を表している。

①ローマ4：17

「このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです」

②ヘブル11：3

「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです」

3. 「神 (エロヒム)」

- (1) ヘブル語では、エロヒムという複数形になっている。
- (2) この言葉には、神が「三位一体の神」であることの暗示がある。
- (3) この節は、神の存在を前提に書かれている。

①聖書には神の存在を証明する記述はない。

②詩篇14：1

「愚か者は心の中で、『神はいない』と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行っている。善を行う者はいない」

4. 「天 (ハシャマイム)」

- (1) この言葉もまた複数形。
- (2) 神は第一の天 (鳥が飛ぶ空間) と第二の天 (宇宙空間) を創造された。

5. 「地 (ハアレツ)」

- (1) 「地」は人類の居住空間。
- (2) そこは、神の人類救済計画の舞台となる空間。

結論

1. 創世記1章1節は、あらゆる誤った世界観を論破するものである。
 - (1) 無神論
 - (2) 不可知論 (神の存在は証明も否定もできないという論)
 - (3) 汎神論 (一切万有は神であり、神と世界とは同一であるという宗教観・哲学観)
 - (4) 多神論
 - (5) 物質主義
 - (6) 自然主義 (自然を唯一絶対または根本の原理とみなす立場)
 - (7) 二元論
 - ①宇宙の根本原理を精神と物質との2実在とする考え方
 - ②または、世界を善悪2つの原理の闘争と見る立場)
 - (8) ヒューマニズム (人間を真理や価値の基礎に据える哲学的立場)
 - (9) 進化論

2. 人生をどう捉えるかは、この聖句にかかっている。
 - (1) 生きているのではなく、生かされている。
 - (2) 目的は自分で作り出すのではなく、神から与えられる。
 - (3) 自己嫌悪から自己受容への転換。

創世記2 創世記1章2節

「カオスから秩序へ」

イントロ：

1. 創世記1：1～3の解釈

- (1) 創世記1：2の日本語訳を読み比べてみる。

(口語訳)「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」

(新改訳改定3)「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた」

(新共同訳)「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」

- (2) 質問：神が創造された世界は、カオス(混沌)なのか。

- (3) これにどう答えるかで、その人の聖書観や世界観が決まってくる。

2. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるか。

- (1) 人生の座標軸を持つ必要がある。トータル的な聖書の理解。

- (2) サタン(悪)の存在をどう理解するかが決まる。

- (3) どういう終末論を持つかが決まる。

- (4) いかにかに生きるかが決まる。

① 未信者からクリスチャンへ

② 霊的な幼子から、成長したクリスチャンへ

創世記1章2節は、私たちの聖書観と世界観を規定する。

I. 創世記1：1～3を巡る3つの立場

1. Original Creation View (オリジナル・クリエイション・ビュー)

- (1) 創世記1：1は、創造の6日間の第1日目に含まれる。

- (2) 神は最初にカオスを創造し、そこから秩序ある世界を仕上げていった。

2. Pre-Creation Chaos View (プリ・クリエイション・カオス・ビュー)

- (1) 創造の前から、何らかの理由でカオスが存在していた。

- (2) 創世記の創造記事は、絶対的(無から有)創造ではなく、相対的な創造である。

- (3) 創世記1：1は、天地創造記事の要約か、あるいはイントロダクションである。

- (4) 2節は、神の創造の材料となるものである。
- (5) 3節以降は、具体的な創造の方法を記している。

3. Gap Theory あるいは、Restitution Theory (ギャップ・セオリー)

- (1) 創世記1：1と2の間に、時間的な隔りがある。
- (2) 1節：天地は完璧な状態で創造された。無から有の創造。
- (3) 2節：完璧な天地が、カオスになっている。
 - ①「トーフー・ワ・ボーフー」という3語がカオスを表現している。
 - ②「トーフー」と「ボーフー」が対になって登場するのはイザヤ34：11、エレ4：23。
 - ③ともに、裁きを表している。
 - ④1節と2節の間に、サタンの墮落がある。
 - ⑤長い時間を想定する必要はない。
 - ⑥恐竜の生存をここに入れようとする人がいるが、それは不必要であり、非聖書的。
- (4) 3節以降：神による回復の業

II. 創世記1章2節

1. 1節の最後

- (1) 日本語訳には出てこない。
- (2) マソラ本文には、1節の最後に「ラフィア (休止符)」が打たれている。
 - ①つまり、1節は、独立した叙述文である。
 - ②要約、イントロダクションではない。次に続く文章でもない。

2. 「ワ」という接続詞

- (1) 次に続く文章ではないので、「And」(そして)とは訳せない。
- (2) 「Now」(さて)が正しい訳である。

3. 「地」という名詞

- (1) ヘブル語では動詞が先に来る。名詞(主語)が先に来るのは、新情報を付加するため。
- (2) 「地」の状態を表す動詞は、「ハイエター (ハヤー)」という動詞。
 - ①通常は、「was」(であった)と訳す。
 - ②ここでは、「became」(となった)と訳すべきである。

4. 「トーフー・ワ・ボーフー」という3語

(1) サタンの墮落の結果 (エゼキエル 28 : 11~16)

- ① 神の御座
- ② 地の管理人。宝石の園。海はない。
- ③ サタンの墮落。カオスの出現。

5. 闇という名詞

- (1) カオスを表す言葉。
- (2) 裁き、滅び、絶望、死、サタンとの関連
- ① 出エジプト 10 : 15、21~23、I サムエル 2 : 9
- ② エペソ 6 : 12

6. 大水という名詞

- (1) 「テホム」であり、深い淵、深い水を指す。
- (2) 混沌として塩水の淵が、かつて栄光の輝いていた地をおおっている。

7. 神の霊という名詞

- (1) ここから、希望が始まる。
- (2) 三位一体の神の第三位格

8. 動いていた (おおっていた) という動詞

- (1) 「メラヘフェット」という動詞。震える、羽ばたく、宙に舞う。
- (2) 手厚い保護の下に置かれている状態。
- (3) 母鳥が卵を抱き、孵化させようとしている状態。
- (4) マタイ 3 : 16 と関係あり。

9. 水という名詞

- (1) 「マイム」と「ヘホム」とは違う。
- (2) 「マイム」は命を与えるもの。
- (3) 聖霊によって、カオスが秩序あるものに変えられ、命が誕生しようとしている。

結論

- 1. 創世記 1 章 1 節と 2 節の間には、ギャップがある。
 - (1) サタンの墮落
 - (2) 被造の世界に下った裁き

(3) そこからの回復の業

2. 聖書理解と信仰の成長

- (1) 十字架は信じるが、復活は信じがたいという段階。
- (2) 復活は信じるが、再臨は信じがたいという段階。
- (3) 再臨は信じるが、千年王国は信じがたいという段階。
- (4) 千年王国は信じるが、新天新地は信じがたいという段階。
- (5) 新天新地まですべて信じるという段階。

3. 信仰の土台

- (1) 字義通りの解釈
- (2) 再臨の後に出現する千年王国は、アダムの罪によって呪われた被造の世界の回復。
- (3) 千年王国の後に出現する新天新地は、サタンの罪によって呪われた世界の回復。
 - ①黙示録 21：1～22：2
 - ②そこには、海は存在していない。

4. 創世記1章2節は、1節と3節のつなぎである。

- (1) 次回は、3節から学ぶ。
- (2) 「光あれ」ということばには、私たちの人生を変える力がある。

創世記3 創世記1章1節～13節

「第1日目～第3日目」

イントロ：

1. 創世記1：1と1：2の間にギャップがあった。
 - (1) 神の創造（1節）
 - (2) サタンの墮落と、被造の世界に下った裁き（ギャップ）
 - (3) 裁かれた状態の被造の世界（2節）
 - (4) 神の霊による再生の兆し

2. きょうの箇所から、創造の6日間が始まる。
 - (1) 「トーフー」とは、カオスのこと。
 - (2) 「ボーフー」とは、虚しい状態のこと。
 - (3) 6日間の創造は、厳密には修復、再生のことである。
 - ① 「トーフー」の修復が、第1日目から第3日目の業
 - ② 「ボーフー」の修復が、第4日目から第6日目の業
 - (4) きょうは、第1日目から第3日目を取り上げる。

3. 創世記1章の「日」について。24時間がどうかという問題。
 - (1) 「日（ヘブル語でヨム）」という語は、必ずしも24時間を表しているわけではない。
 - (2) しかし、数字とともに使われる場合は、必ず文字通りの24時間を表している。
 - (3) 「夕があり、朝があった」という表現は、「日」が24時間であることを示している。
 - (4) 安息日の規定は、神が7日目に休まれたことを土台として後に出てくるもの。
 - (5) 創世記1：14を見ると、すでに日、月、年という時間の数え方が存在している。
 - (6) 創世記1章を厳密に解釈すると、「日」とは24時間のことであるとの結論に到達する。

4. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
 - (1) 信仰の目的は何か。
 - (2) 聖書が書かれた目的とは何か。

天地創造の記事は、信仰の目的が何か、聖書が書かれた目的が何かを私たちに教えている。

I. 第1日目(創世記1:3~5)

はじめに

- (1) 第1日目には7つのステップが見られる。第2日目以降も、それが繰り返される。
 - (2) ここから、創世記1章1節と2節とは、第1日目以前の状況であることが分かる。
1. 神がことばを発する。「神は〇〇と言われた」
 - (1) 神はことばによって天地を創造された。
 - (2) ヨハネ1:1~3と合致する。
 - (3) ロゴス(第二位格の神)が、父なる神、聖霊とともに、創造の業に参加。
 - (4) 詩篇33:6と合致する。
 2. 神のことばの内容は宣告(命令)である。
 - (1) 「〇〇あれ」という動詞は、ヘブル語では「イエヒ」。
 - (2) 聖書に記された神の最初のことば。
 - (3) 神の御名である「ヤハウエ(ヘブル語では4文字)」と深い関係のある語。
 - (4) 第1日目の宣告は、「光あれ」というもの。
 3. 神の宣告が成就する。「すると〇〇があった」
 - (1) 「すると光があった」
 - (2) この光は、太陽光ではない。
 - (3) 太陽が作られるのは第4日目のことだから。
 - (4) この光は、暗闇に輝くシャカイナグローリー(神の栄光)のこと。
 - (5) IIコリント4:6参照。
 4. 区別するという神の行為が続く。
 - (1) 「神は光とやみとを区別された」
 5. 命名(あるいは祝福)という神の行為が続く。
 - (1) 「神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた」
 - (2) 命名するという行為は、命名する対象に対して権威を持っていることを表している。
 6. 完成したものに対して神の評価が為される。

- (1) 「神は見て、良しとされた」
- (2) 第1日目の場合には4番目に登場するが、第2日目以降は6番目に登場。

7. 締めくくりのことば

- (1) 「夕があり、朝があった。第1日」
- (2) ユダヤ暦では、1日は夕から始まる。

II. 第2日目 (創世記1：6～8)

- 1. 神がことばを発する。「神は仰せられた」。
- 2. 宣告 (命令)
 - (1) ここでも、「〇〇あれ」という動詞はヘブル語の「イエヒ」。
 - (2) 宣告の内容は、「大空が水の真ただ中にあれ。水と水との間に区別があれ」。
- 3. 神の宣告が成就する。「そのようになった」。
- 4. 区別するという神の行為が続く。
 - (1) 「神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された」
 - (2) 「大空」とは、第一の天と呼ばれるもの (間が息をする空間、鳥が飛ぶ空間)。
 - (3) 地球を覆っていた塩水の淵とガス状の霧とが分離され、その間に「大空」が現れた。
- 5. 命名 (あるいは祝福) という神の行為が続く。
 - (1) 「神は大空を天と名づけられた」
- 6. 神の評価
 - (1) 第2日目に関しては、「神は見て、良しとされた」という言葉が出てこない。
 - (2) ユダヤ教のラビ (ラシ) の説明によれば、第2日目の業は完成していない。
 - (3) 第3日目になって完成する。第3日目には、「良しとされた」が2度出てくる。
- 7. 締めくくりのことばが出てくる。
 - (1) 「夕があり、朝があった。第2日」

Ⅲ. 第3日目(創世記1:9~13)

1. 神がことばを発する。
2. 宣告(命令)
 - (1) 「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ」
 - (2) 塩水で覆われた地球に変化を加えた。
3. 神の宣告が成就する。「そのようになった」
4. 区別するという神の行為が続く。
 - (1) 渴いた地と水のある所が区別されている。
5. 命名(あるいは祝福)という神の行為が続く。
 - (1) 「神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた」
 - (2) 神による命名は、第3日目で終わる。
6. 完成したものに対して神の評価が為される。「神はそれを見て良しとされた」
7. 2度目のサイクル
 - (1) 第3日目の場合は、もうひとつの創造の行為が為されている。
 - (2) 宣告の内容
 - ①口語訳聖書がいい。「地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ」
 - (3) 神の宣告は、ただちに成就した。
 - (4) この場合の創造は、直接的なものではなく、間接的創造。
 - (5) 地から生じた植物は3種類あったと考えるのがよいと思う。
 - ①一般的な草の類と穀類
 - ②香草、野菜類
 - ③果樹の木々
 - (6) 「種類に従って」種を残したり、実を結んだりした、
 - ①これは、植物界の「種の垣根」である。
 - (7) 3日目の場合は、「神はそれを見て良しとされた」という表現が、2度出てくる。
8. 締めくくりのことばは、「夕があり、朝があった。第3日」。

結論

1. 信仰の目的は何か。
 - (1) 第1日目は、シャカイナグローリーで始まっている。
 - (2) 神の最初のことばは、「イエヒ」であった。
 - (3) 黙示録は、シャカイナグローリーで終わっている。黙示録22:5
(例話) 東後勝明先生の証し 洗礼を受ける際の質問

2. 聖書が書かれた目的は何か。
 - (1) 人類の救いではない。
 - (2) 神の栄光である。
 - (3) 人類の救いは、その中に含まれる。
(例話) ゴルフで「集中しなさい」と言われても分からない。
 - ①クリスチャンでない人たちは、人生における「集中」を理解できない。
 - ②クリスチャンもまた、自分中心の信仰にとどまっている限りは、これを理解できない。
 - ③集中とは、「神の栄光」、シャカイナグローリーに対して焦点を合わせることである。

創世記4 創世記1章14節～31節

「第4日目～第6日目」

イントロ：

1. 前回の復習：創造の6日間について
 - (1) 1章2節：「トーフー」とは、カオスのこと。
 - (2) 1章2節：「ボーフー」とは、虚しい状態のこと。
 - (3) 6日間の創造は、厳密には修復、再生のことである。
 - ①「トーフー」の修復が、第1日目から第3日目の業
 - ②「ボーフー」の修復が、第4日目から第6日目の業
 - (4) きょうは、第4日目から第6日目を取り上げる。

2. 第1日と第4日、第2日と第5日、第3日と第6日が対応している。

3. 7つのステップが基本的には踏襲されている。

4. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
 - (1) 日本は自殺大国
 - ①自殺者数は、2007年に33,093人。連続10年3万人以上（警察庁統計資料）
 - ②自殺率は、10万人に約24人。旧ソ連邦に匹敵。米国の2倍以上。
 - ③交通事故死。2006年に6,352人。10万人当たり4.97人。
 - ④3分の2以上が男性。
 - ⑤年齢と自殺者数とは正比例する。
 - (2) 自殺の原因（3大原因で84パーセントを占める）
 - ①健康問題 48%
 - ②経済・生活問題 24%
 - ③家庭問題 12%
 - (3) 旧ソ連邦の例：ストレス、そして心の病気、特に、うつ病の状態
 - (4) うつ病は、ありふれた病気。一生のうちでうつ病にかかる人は14人に1人とも。
 - (5) 問題は、人間の価値の源泉をどこで見出すかに尽きる。
 - (6) うつの時も、貧しい時も、病気の時も、年老いても「私には価値がある」と言えるか。

天地創造の記事は、人間の価値がどこから来ているかを教えている。

I. 第4日目(創世記1:14~19)(第1日目と対応している)

1. 太陽、月、星が造られた。
 - (1) ここで造られた光る物が、3節の「光(シャカイナグローリー)」に取って代わる。
 - (2) 季節、日、年のために役立つ。
 - (3) 季節、日、年という概念が初めにあって、それを示すために光る物が造られた。

2. 天の光るものは、「しるし」としての役割を果たす。
 - (1) 航路を示すためのしるしとなる(ヨブ38:31~33)。
 - (2) 神の栄光を示すしるしとなる(詩篇19:1、ロマ1:20)。
 - (3) 神とイスラエルの契約が永遠に続くことのしるしとなる。(エレミヤ31:35~36)

3. 昼と夜、光とやみが区別された。

4. 神は見て、それを良しとされた。

5. 締めくくりのことば、「夕があり、朝があった」が出てくる。

II. 第5日目(創世記1:20~23)(第2日目と対応している)

1. 海には海の生き物が、空には鳥が創造された。
 - (1) 「種類に従って」:必ずしも生物学的な種類ではない。
 - (2) 「種の壁」のことである。

2. 1:21に出てくる「海の巨獣」とは何か。
 - (1) ヘブル語では「タニニム(単数形タニン)」。旧約聖書に14回出てくる。
 - (2) 新改訳聖書の訳
 - ①「海の巨獣」
 - ②「蛇」(出エジプト7章)
 - ③「竜」

*イザヤ27:1ではレビヤタンと同じ生き物。
*イザヤ51:9ではラハブと同じ生き物。

④「わに」(エゼ29:3)

(3)「タニニム」が出てくる理由は、バビロニア神話(異教の創造神話)を否定するため。

*それらの神話では、天地は、神々と海の巨獣の戦いの結果誕生したとされる。

*神は唯一至高のお方であり、すべての生き物を創造された方

例話：日本の創造神話(小林永濯・画、明治時代)

古事記と日本書紀には、「国生み」の神話が記されている。

伊邪那岐(イザナギ)・伊邪那美(イザナミ)という二柱の神は、別天つ神(ことあまつがみ)たちから、国生みの命令を受ける。それは、漂っていた大地を完成させよという命令であった。別天つ神たちは、天沼矛(あめのぬぼこ)を二神に与えた。

イザナギ・イザナミは、天浮橋(あめのうきはし)に立って、天沼矛(あめのぬぼこ)で、渾沌とした海をかき混ぜるのであるが、この時、矛から滴り落ちたものが、積もって島となった。この島を淤能基呂島(オノゴロ島、あるいはオノコロ島)という。これが、日本で最初に出来た島だとされる。「こをろこをろ」とかき混ぜて引き上げたので、この名が付いたという説がある。イザナギ・イザナミの二神は、この島に降り立ち、次々に島を造っていくのである。創世記の創造物語と日本の創造神話は、全く内容が異なるものである。

3. 第5日には、命名はなくて、祝福という行為がある。

(1)「生めよ、ふえよ。海の水に満ちよ、また鳥は地にふえよ」

(2) 神がお語りになった最初の祝福のことば。

4. 神の評価と締めくくりのことばが続く。

III. 第6日目前半(創世記1:24~25)(第3日目と対応している)

1. 動物の創造

(1) 人間と同じように、動物も地から形作られた(創2:19)。

(2) 人間と高等動物の体には、類似性がある。

2. 3種類の動物。

(1) 家畜

(2) はうもの。足がないか、足が短いもの。両生類、爬虫類。

(3) 野の獣。家畜にならない動物。

3. 種類に従って創造された。「種の壁」。

4. 神は見て、それを良しとされた。

IV. 第6日目後半(創世記1:26~31)(第3日目と対応している)

1. 6日目の創造は、第3日目と同じように2段階で行われる。

(1) 動物が創造され、最後に人間が創造される。

2. 新しい形の構文

(1) 「われわれに似るように、…人を造ろう」。それまでは、「○○あれ」。

(2) 神の創造の御業がクライマックスを迎えたことを示している。

(3) 「われわれ」という複数形の主語は、神が三位一体のお方であることを表している。

(4) 「人」はヘブル語で「アダム」。ここでは、アダムが普通名詞として使われている。

3. 「神のかたち」とはどのようなものか。

(1) 「かたち」はヘブル語で「ツェレム」。

(2) その意味は、偶像、彫像、似姿(幻で見る形)、などである。

(3) 「神のかたち」の外面的な性質。

①人間は言葉を使用する。

②顔に表情がある。

③恥を感じることができる(顔が赤くなる)。

④自然界を支配する能力がある。

(4) 「神のかたち」の内面的な性質。

①知性

②感情

③意志

④靈性(神を認識する能力)

(5) この段階での人間の状態

①罪を犯すことができた。

②罪を犯さないこともできた。

③墮落以降、罪を犯さないということができなくなる。

4. 創世記1：27

- (1) 「創造する (ヘブル語でバラ)」という動詞が3度も出てくる (クライマックス)。
- (2) 神は人を創造された。
- (3) ご自分のかたちとして創造された。
- (4) 男と女とに創造されました。男女は同じ日 (6日目) に創造された。

5. 創世記1：28～30

(1) エデン契約と呼ばれる契約

- ① 聖書の最初の契約。
- ② 2章に入ってから、さらに詳しい内容が示される。
- ③ 神がアダム (アダムは人類の代表) と結んだ契約である。
- ④ しかし、結果的にはアダムはこの契約を破る (ホセア6：7参照)。

(2) 「エデン契約」の条項

- ① 地に増え広がれという命令。「生めよ。ふえよ。地を満たせ」。
 - * 男女の性的な関係を前提とした命令。
 - * 性的な関係を墮落の結果と見る見方は、聖書的ではない。
- ② 地を管理せよという命令。「地を従えよ」。
 - * 地とそこに住むものとの支配・管理する特権が与えられた。
 - * 詩篇8：6～8
 - * ヘブル2：5～9
 - * この特権は、かつてサタンに与えられていたものである (エゼ28：11～19参照)。
- ③ 生物界を管理せよという命令。「海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」。
 - * アダムが動物に名前を付けるのは、管理権の行使。
- ④ 食物が与えられる。
 - * この時点では、人類は菜食主義者である。
 - * 肉食は、動物の死がなければあり得ないこと。
 - * 自然界に死が入ってくるまでは、人類は菜食しか知らなかった。
 - * 動物たちもまた、菜食によって命を維持した。

6. 創世記1：31

- (1) 「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」
 - ① 「非常に良かった」と書かれているのは、第6日だけ。
 - ② この日が、いかに特別な日であったかが分かる。
- (2) 締めくくりのことばは、「夕があり、朝があった。第六日」。

結論

1. 被造の世界は、「非常に良かった」という状態から始まっている。
2. それを悪くしたのは、私たちの罪である。
3. 人間性を正しく理解することによって、私たちの生きる方向性が確立する。
 - (1) 「良いもの」と「罪」の区別により、人間の生活は積極的で感謝に満ちたものとなる。
 - (2) 人間の価値は、生産性や、年齢や、優劣によって決まるものではない。
 - (3) 私たちは、不完全から完全へと日々前進している。

①Ⅱコリント3：18

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」

②「姿を変える」は、「メタモフォウ」という動詞。

③キリストが変貌した時の動詞（マタイ17：2、マルコ9：2）

③死という繭にくるまれても、そこから見事な蝶に変貌する希望がある。

創世記5 創世記2章1節～4節a

「第7日目と第1番目のトルドット」

イントロ：

1. 前回の復習：ここまでで創造の6日間について学んだ。
 - (1) カオスからの創造であった。
 - (2) 第1日目から第3日目までと、第4日目から第6日目までが対応している。

2. きょうのメッセージの内容
 - (1) 前半：第7日目を取り上げる。
 - ①今までの6日間と異質な日、特別な日。
 - ②創世記1：1～2：3で、最初の区切りが終わる。
 - ③ここまでが、創世記のイントロダクションに当たる。
 - (2) 後半：次に、創世記2：4の前半だけを取り上げる。
 - ①これ以降の創世記は、11区分に分かれる。
 - ②キーワードは、ヘブル語の「トルドット」(経緯)である。
 - ③最初の「トルドット」は、2：4～4：26
 - (3) 「トルドット」の意味を解説しながら、創世記の展開を展望する。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
 - (1) 「私は、どこから来て、どこへ行こうとしているのか」という疑問。
 - (2) 聖書信仰の中心は、歴史観である。
 - (3) 創世記は、人類の歴史の源を解説している。
 - (4) きょうのメッセージは、聖書的歴史観の(ラフスケッチ)下書きのようなものである。

創世記は、私たちがどこから来て、どこに行こうとしているかを教えてくれる。

I. 第7日目(創世記2：1～3)

1. 第7日目は、特別な日となった。
 - (1) この日、神は創造のわざの完成を告げられた。
 - (2) 被造物は、完璧に出来上がった。

2. この日、神はなさっていたすべてのわざを休まれた。
 - (1) 労働して疲れたから休んだという意味ではない。
 - (2) ここには、創造のわざの完成、終了、休止、などの意味がある。

3. 「休まれた」という動詞は、ヘブル語では「シャバット」
 - (1) 安息日のことを「シャバット」と言うが、ここでは「シャバット」は動詞。
 - (2) この時点では、安息日という名称も規定もない。
 - (3) 安息日の規定は創造の秩序の中に含まれていると主張する人もいる。
 - (4) しかし、安息日を守れという命令は、きょうの箇所にも、エデン契約の中にもない。
 - (5) それが出てくるのは、出エジプト記に入ってからである。
 - (6) 出エジプト 31 : 17
「これ（安息日の規定）は永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。それは主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、いこわれたからである」
 - (7) 奴隷から自由人とされたことの「しるし」である。

4. 神は第7日目を祝福し、この日を聖であるとされた。
 - (1) 第7日目を他の日とは区別し、その日を高く上げた。
 - (2) 「聖別する」とは、他のものから区別するという意味。

5. ヘブル4章は、第7日目の安息は「神の安息」を予表していると教えている。
 - (1) この「神の安息」は、地上生涯において経験する安息である。
 - (2) と同時に、終末的な概念（将来経験する安息）でもある。

6. 創世記のイントロダクションは、創世記1 : 1～2 : 3までで終わった。
 - (1) カオスからの創造
 - (2) 人は神のすがたとして創造された。
 - (3) 動物世界を支配・管理せよという命令が人に与えられた。
 - (4) 神は第7日目に安息された。
 - (5) 3つの祝福
 - ① 1 : 22 動物世界の祝福
 - ② 1 : 27、28 人の祝福
 - ③ 2 : 3 安息日の祝福

II. トルドット

1. これ以降の記述を、モーセは11のトルドットに分けている。

- (1) モーセは、11の文書(家系に伝わる文書)をまとめた。
- (2) トルドットの意味は、家系、系図、子孫、歴史など。
- (3) 意識すると、「○○のその後の展開」ということである。
- (4) トルドットはタイトルであり、その内容は、その後に続く。

2. トルドットの特徴

- (1) 「これはテラの歴史である」と言っても、内容はアブラハムである。
- (2) 「これはアブラハムの子イサクの歴史である」の内容は、ヤコブの生涯である。
- (3) 「これはヤコブの歴史である」の内容は、ヨセフの生涯である。
- (4) それぞれの中に、祝福と呪いのテーマがある。
- (5) 先に行くほど、メシアの家系として選ばれている者の範囲が狭まっていく。

3. 11のトルドット

- (1) 創世記2:4~4:26 「これは天と地が創造されたときの経緯である」
- (2) 創世記5:1~6:8 「これはアダムの歴史の記録である」
- (3) 創世記6:9 「これはノアの歴史である」
- (4) 創世記10:1 「これはノアの息子、セム、ハム、ヤペテの歴史である」
- (5) 創世記11:10 「これはセムの歴史である」
- (6) 創世記11:27 「これはテラの歴史である」
- (7) 創世記25:12 「これはサラの女奴隷エジプト人ハガルがアブラハムに産んだアブラハムの子イシュマエルの歴史である」
- (8) 創世記25:19 「これはアブラハムの子イサクの歴史である」
- (9) 創世記36:1 「これはエサウ、すなわちエドムの歴史である」
- (10) 創世記36:9 「これがセイルの山地にいたエドム人の先祖エサウの系図である」
- (11) 創世記37:2 「これはヤコブの歴史である」

4. 第1番目のトルドット(創世記2:4~4:26)

- (1) 「これは天と地が創造されたときの経緯である」
 - ①神が創造された天地がその後どうなったのか、というのがその内容。
 - ②天地は、カオスへと回帰していく。
- (2) アダムとイブの創造
 - ①第6日目の記述に戻っている。

②ヘブル文学における再記述の法則を理解する。

- (3) 人類の墮落
- (4) 罪に対する神の呪い
- (5) その後の罪の広がり
- (6) 子孫への影響(カインとアベル)
- (7) エデン契約(条件付き契約)
 - ①「もしあなたが、～するなら」という形式
- (8) アダム契約(無条件契約)
 - ①「わたしは、～する」という形式

②創世記3:15

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとかみつく」

- *「蛇の子孫」とは誰か。
- *「女の子孫」とは誰か。
- *「両者の戦い」の内容は何か。

結論

- 1. 自分が育った町に久しぶりに行ってみると、懐かしい。
 - (1) 小さな始まり。
 - (2) 今に至るまでの歩みを振り返る。
 - (3) これから先のことを展望する。

- 2. 創世記の第1番目のトルドットには、懐かしさがある。
 - (1) 私たちの先祖の物語。
 - (2) 今に至るまでの歩みを振り返る機会。
 - (3) これから先のことを展望できる。

- 3. ヘブル11:13~16
 - (1) 旅人であり寄留者であった。
 - (2) 天の故郷にあこがれていた。
 - (3) 神は彼らの神と呼ばれることを恥とнаさいませんでした。
 - (4) 神は彼らのために都を用意しておられました。

創世記6 創世記2章4節b～25

「エデンの園に置かれた人」

イントロ：

1. 前回の復習：ここまでに創造の7日間について学んだ。
 - (1) カオスからの創造であった。
 - (2) 神は、6日間ですべてのものを創造し、7日目に休まれた。
 - (4) 創世記1：1～2：3までが創世記全体のイントロダクション（プロローグ）。
 - (5) 創世記は、11のトルドットに分かれる。
 - ①トルドットの意味は、家系、系図、子孫、歴史など。
 - ②トルドットはタイトルであり、その内容は、その後が続く。

2. きょうのメッセージの内容
 - (1) 第1のトルドットに入る：天と地の経緯（トルドット）
 - (2) 創世記2：4～25の内容は、4つに分かれる。
 - ①人の創造
 - ②エデンの園の創造
 - ③エデン契約
 - ④女の創造

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
 - (1) 歴史から学ばない者は、記憶喪失症の状態にある。
 - (2) 歴史を学ぶ理由は、今を豊かに生きるためである。
 - (3) 自分の物語を熟知する人は、人生に意味と方向性を見出すことができる。

人類のルーツを知ることは、今を豊かに生きるための力となる。

I. 人の創造（創世記2：4b～7）

1. 再記述の法則
 - (1) 人の創造は6日目に完成していた。
 - (2) 独立した2つの創造記事があるということではない。
 - (3) 聖書の中にある再記述の法則は、解釈学の重要な原則のひとつである。

2. 地にはまだ植物がなかったという記述をどう受け取ればよいのか。

- (1) 植物の創造は、3日目に終わっている。
- (2) 「地」とは全地のことではなく「エデンという限定された地域」のこと。
- (3) 「それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである」
 - ① 雨は、ノアの洪水以降の現象。それまでは、霧が地を潤していた。
 - ② アダムが耕すようにとの命令を受けたのは、エデンの園だけ。

3. 人の創造

- (1) 「土地のちり」とは「大地の元素」のこと。
- (2) 「土地」はヘブル語で「アダマー」であり、「人」はアダムである。
- (3) 「形造り（ヤツァー）」という動詞は、「創造（バラ）」とは異なる。
 - ① 「バラ」は、神のみができる行為であることを示す。
 - ② 「ヤツァー」は、すでにあるものを用いて人を形造られたことを示す（陶器師）。
- (4) 人の二面性
 - ① 土地のちりから作られた人は、自然界の一部である。
 - ② この要素は、人間を謙遜にさせる（創世記3：19）
 - ③ 「いのちの息」が吹き込まれたので、崇高な存在となった。「神のかたち」。
 - ④ 無価値であるという自己認識と、崇高な存在であるという自己認識のバランス。

II. エデンの園の創造（創世記2：8～14）

1. エデンとエデンの園

- (1) エデンとは、メソポタミア地方のどこかの地名。
- (2) そのエデンの東側に設けられた園がエデンの園。
 - ① 「設ける」という動詞は、「植える」という意味。
 - ② エデンの語源は、「水で潤っている」という意味。
 - ③ アダムは、エデンの園以外（エデン西部？）で形作られ、エデンの園に置かれた。
- (3) この園は3つの名前で呼ばれている。
 - ① 「エデンの園」（創世記2：15、3：23、24）
 - ② 「主の園」（創世記13：10、イザヤ51：3）
 - ③ 「神の園」（エゼキエル28：13、31：9）

2. いのちの木と善悪の知識の木

- (1) エデンの園の生活環境は、完璧なものだった。
- (2) そこには、外見が美しく、美味しい実を付ける木だけが生えていた。
- (3) 園の中央には、「いのちの木」が生えていた。
 - ①それを取って食べると肉体的に死ななくなる木
 - ②旧約聖書：創世記3：22、3：24、箴言3：18、11：30、13：12、15：4など
 - ③新約聖書：黙示録2：7、22：2、22：14、22：19
- (4) 園の中央には、「善悪の知識の木」も生えていた。
 - ①ユダヤ教の伝承：ぶどう、小麦、いちじく、エトログ（柑橘類の一種）
 - ②キリスト教の伝統：りんご
 - ③「善悪の知識」とは、知識の総体のことであり、体験的知識のことである。
 - *この木から食べると「知識の総体」を得る。
 - *それは、人が自分にとって何がよいかを決定すること、神のように振舞うこと。
 - *この木から取って食べると、人は知識の総体を得る。
 - *しかし、実際の行動においては、その知識によって生きることができない。

3. 4つの川

- (1) エデンから一つの川が流れ出ていた。
- (2) その川は園を潤し、それから4つの川に枝分かれしていた。
- (3) 第3の川ヒデケル（ティグリス）
- (4) 第4の川ユーフラテス
- (5) 他の2つの川は分からなくなっている。ノアの洪水で地形が激変したのであろう。

Ⅲ. エデン契約（創世記2：15～17）

1. エデン契約の前半（7つの条項の中の4つの条項。創世記1：28～30）

- (1) 地に広がれという命令
- (2) 地を管理せよという命令
- (3) 生物界を管理せよという命令
- (4) 食物が与えられるという約束

2. エデン契約の後半（残りの3つの条項）

- (5) エデンの園を耕し、守ること。
 - ①「置き」という動詞はノアという名前と同じ語源。留まる、休むといった意味。
 - *カナンのは地はイスラエルの民にとって安息の地であった（詩篇95：11）。

*エデンの園はアダムにとって安息の地となった。

②「耕させ(アボダー)」という言葉には、仕事、奉仕、礼拝などの意味がある。

*労働は、アダムの墮落の以前からあったもの。

*本来労働とは、神への奉仕であり礼拝である。

*それは苦しいものではなく、喜びをもたらすもの。

(6) どの木からでも思いのまま食べてよい。善悪の知識の木から取って食べてはならない。

①人は、創造されたままの聖なる状態にあったが、それが定着していたわけではない。

②人は、罪を犯す能力も、犯さない能力も、併せ持っていた。

③この木は、人が神の権威を認めるか、神の命令に忠実であるかどうかを試すもの。

④この命令は、時限立法であり、人がそのテストに合格したなら、取り去られるもの。

⑤合格すれば、人は罪を犯すことが出来ない状態、聖なる性質が確定した状態になる。

⑥これは、サタンと天使たちに起こったこと。

*サタンの反逆に加担した3分の1の天使たちは墮天使となった。

*残りの3分の2は、聖なる天使であることが確定した。

(7) 善悪の知識の木から取って食べるその時、人は必ず死ぬ。

①これは、霊的な死のこと、神との断絶のことである。

②神の命令に違反した瞬間に霊的死が人を襲った。

③しかし、肉体的な死は徐々にやって来た。

IV. 女の創造(創世記2:18~25)

1. 「人が、ひとりでいるのは良くない」(18節)

(1) この節に来て初めて「良くない」という言葉が出てくる。

(2) 「悪い」という意味ではなく、「未完成である」、「満たされていない」という意味。

①魚のいない海や、動物のいない陸地は未完成。

②助け手のいない男も未完成。

2. 「助け手(エゼル)」

(1) この語は、決して否定的なものでも、価値の低いものでもない。

①神ご自身を指すものとしても用いられている(出18:4。エリエゼルという名)。

②墮落以前の男女関係には、支配関係や上下関係はなかった。

(2) 実際に助け手を造る前に、神は不思議なことをしている。

①野の獣と空の鳥が、人のところに連れて来られた。家畜はすでに人とともにいた。

②人はそれらの生き物に名をつけた。

*人が動物界の上に権威を持っていることを表している。

*人は造られた瞬間から言葉を持っていた。

③すべての生き物に名前を付け終わった時に、孤独を味わった。

*ふさわしい助け手が見あたらなかった。

*以上のことが、なぜ助け手を造らねばならなかったかの説明になっている。

(3) 女（助け手）は、人のあばら骨から造られた。

①「あばら骨（ツェラー）」とは、脇腹のこと。

②神は、人の脇腹のどこかから骨と肉とを取り、そこを肉でふさがれた。

③人から取ったものをひとりの女に作り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

④人は女を見て、「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉」と言った。

*これは、人が女に対して語った契約の言葉

*Ⅱサムエル5：1で、北の10部族がダビデに対してこの言葉を語っている。

⑤「これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから」

*ヘブル語の言葉遊び。

*「これをイシャー（女）と名づけよう。これはイシュ（男）から取られたのだから」

*バベルの塔以前の言語は、ヘブル語であった。

⑥人と女の間には結ばれた契約

*「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」

*「その父母を離れ」とは、精神的な独立のこと。

*「一体となる」とは糊でくっつけられたような状態、互いに契約を守り続ける状態。

⑦「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」

*神に対しても、お互いに対しても、隠したり、恥じたりする必要のない状態。

*墮落以前の世界には、理想的な男女関係があった。

結論

1. 人類のルーツはここにある。

2. エデン契約の重要性

(1) 人の聖さを確定するための契約。

(2) 罪の本質は、神から自立して、自分が神になること。

(3) ユダヤ教では原罪を教えない。

①神の命令に違反した瞬間、アダムは「死を免れない」存在となったと教える。

(4) 聖書は、アダムの原罪がその子孫たちに遺伝的に継承されたと教える。

(5) 原罪の問題を解決するのが、最後のアダム（Ⅰコリント 15：45）であるキリスト。

(6) 今、キリストにつながり、霊的命を受けようではないか。

創世記7 創世記3章1節～13節

「人類の墮落」

イントロ：

1. 前回の復習：ここまでの創造の7日間について学んだ。
 - (1) 創世記1：1～2：3までが創世記全体のイントロダクション（プロローグ）。
 - (2) 創世記は、11のトルドットに分かれる。
 - ①トルドットの意味は、家系、系図、子孫、歴史など。
 - ②トルドットはタイトルであり、その内容は、その後が続く。
 - (3) 第1のトルドットを数回に分けて学ぶ。
 - (4) 創世記の記事は、神話や伝承ではなく、歴史的事実である。
ヨハネ8：44、ロマ5：21、16：20、Iコリ15：21、IIコリ11：3～4、IIテモ2：14
2. メッセージのアウトライン
 - (1) 配役紹介
 - ①アダム
 - ②エバ
 - ③蛇とサタン
 - (2) 物語の展開
 - ①誘惑
 - ②墮落
 - ③霊的死
 - ④神との対面
3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
 - (1) 最近の事件の事例
 - ①秋葉原事件 派遣社員であった。
 - ②大阪駅通り魔事件
「(自分が車内で事件前にけがをした時に) 乗客は見てるだけで助けてくれなかった。同じ所を切りつけようと思った」
 - ③14歳の少年によるバスジャック事件
「男女交際でしかられた。家族をめちゃくちゃにしたかった」
 - (2) 私たち人類に何が起きているのか。
 - ①問題の源はどこにあるのか。

②解決策はあるのか。

人類が抱える問題の源と解決策を探る。

I. 配役紹介

1. アダム

- (1) 無垢の状態
- (2) 聖さが確定していない状態
- (3) 人類の代表

2. エバ

- (1) 助け手(エゼル)として創造された。
- (2) 男と女とは、役割の差はあっても、対等な存在。
- (3) ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいとは思わなかった。

3. 蛇とサタン

- (1) サタンが蛇の中に入って、女と対話する。

Ⅱコリント11:3、黙示録12:9、20:2

- (2) 蛇とはヘブル語で「ナハシュ」

- ①ナホシェット(青銅)と語源は同じ。
- ②民数記21:9では、モーセが上げた蛇を「ナハシュ・ナホシェット」と呼ぶ。
- ③Ⅱ列王18:4では、偶像化した青銅の蛇を「ネフシュタン」と呼ぶ
- ④蛇は、輝きを持った生物であることが暗示されている。
- ⑤サタンもまた、光の天使を装う。Ⅱコリント11:14。
- ⑥動詞ともなる。占いをするという意味。

創世記30:27、44:5、15、レビ記19:26、申命記18:10

- ⑦名詞ともなる。占い。中近東の占いは、蛇を使うが多かった。

民数記23:23、24:1。

- (3) 蛇は狡猾

- ①ヘブル語では、「アルーム」
- ②創世記2:25 アダムとエバは、アルミム(アロームの複数形)。言葉遊びがある。
- ③アダムとエバは、正直で悪については無知。サタンの畏を知らない。
- ④アルームの意味。狡猾。知恵が働く、分別がある。

⑤これは中立の言葉。蛇はそういう性質を持っていた。それ自体は悪いことではない。

⑥いい意味での例

箴言1：4、12：16、23、13：16、14：8、15、18、22：3、27：12

⑦悪い意味での例

ヨブ5：12、15：5

⑧サタンは蛇を利用することにした。自分が失った地に対する権威を回復しようとした。

II. 物語の展開

1. 誘惑(3：1～5)

(1) 2：25と3：1の間の時間の経過は分からない。

(2) サタンの最初の質問：神の命令の現実性を疑わせる。

①サタンは神学者。神のことばをあいまいにさせる。

②不自由な印象を与える。

(3) エバの回答。アダムから聞いていたこと。

①自由が与えられているという認識はある。

②禁止内容を理解していた。

③「それに触れてはいけない」。神のことばに何か足したのか？

*しかし、罪は「食べた」ことから始まる。

*アダムがこれを伝えていたのであろう。

④エバは結果を理解していた。

(4) 聖書に記された最初の嘘

①目が開け

②神のようになり

*サタンは自らこの欲望を持っていた。

*イザヤ14：12～14。5つの野望。第5の野望は14：14。

*同じ野望が、人間の墮落につながる。

③善悪を知るようになる。

(5) サタンの方法論

①神の知恵、愛、義に疑問を投げかける。

②神のことばを否定する。

③不従順が、よりよい結果をもたらす。

2. 墮落(3：6)

(1) Iヨハネ2：16にある3つの分野での誘惑。

①食べるのに良く

②目に慕わしく

③いかにも好ましかった。

(2) 食べることで、今持っていないものを手に入れる。食欲。

(3) エバの墮落

①彼女は、助け手としてではなく、新しいことを始める役割を果たしている。

②蛇がエバに対して果たした役割を、エバがアダムに対して果たしている。

(4) アダムの墮落

①「いっしょにいた」。アダムはそばにいて見ていた。

②アダムは頭としての役目を果たさず、罪の行為に同意した。

(5) 罪の重みが異なる。

①エバは欺かれた。

I テモテ 2 : 13~14、II コリント 11 : 3

②アダムは、知っていて行った。反逆の罪。アダムの責任が大きい。人類の代表。

ロマ 5 : 12~21 I コリント 15 : 20~23

(6) エデン契約の破棄

①ホセア 6 : 7

「ところが、彼らはアダムのように契約を破り、その時わたしを裏切った」

3. 霊的死 (3 : 7~8)

(1) ふたりの目は開かれた。サタンが約束したような内容ではなかった。

(2) 自分たちが裸であることを知った。

①積極的な意味での知識ではなく、「裸であること」を知った。

②恥の感覚。

③ 2 : 25 の裸は、「アルミム」(健康な関係)。

④ 3 : 7 の裸は「エルミム」(恥の感覚)。同じ意味であるが、異なった表記がされている。

⑤無垢な性質を失い、欲望を持つようになった。

(3) いちじくの葉をつづり合わせる。

①肌につけて着ること。

②中東では一番大きな葉をつける。

*タルムード：罪を犯した場所で、その繕いをする」と解説している。

(4) 腰のおおい(生殖器を覆う)

①自分の裸を隠そうとする。

②人間の命の源が罪によって汚れた。

③原罪が男女の肉体関係を通して子孫に伝わる。

詩篇 51 : 5

- ④互いの目から恥を隠すことに成功した。
- ⑤しかし、神の目から恥を隠すことはできない。
- ⑥これ以降、人の前に裸をさらすことは恥となった。

創世記 9 : 23、出エジプト 32 : 25、黙示録 3 : 18

(5) 神からの断絶：霊的死

- ①神の声を聞いた。シャカイナグローリーのこと。この場面では、声を先に聞いている。
- ②歩き回られる神。習慣的行為を示す。
- ③「そよ風の吹くころ」：中東の夕方。
- ④彼らは身を隠した。神との交わりが不可能となった。

*新しい関係(否定的な関係)が出たことを認識していた。

*罰に対する恐れ。神から隠れる。

⑤罪の結果

*人は罪人としての立場からしか、善悪を知ることができない。

*ロマ 7 : 19

「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」

4. 神との対面 (3 : 9~13)

(1) 最初の質問

- ①「あなたは、どこにいるのか」。「アイェカー」という一語。神は知っている。
- ②「なぜ、隠れているのか」という質問。認罪を求めている。

創世記 4 : 9 カイン、創世記 16 : 8 ハガル

(2) アダムの答え

- ①どこにいるかは答えていない。
- ②今まで経験しなかった「神への恐れ」を経験したと答えている。
- ③アダムは裸ではない。自分が神の前に裸であるという認識が、彼に恐れを与えた。
- ④「私」という主語。エバに罪を押し付けていない。

(3) 第2の質問

- ①「裸であるのを、だれがあなたに教えたのか」。裸であることは分かる。

*この質問は、裸であるという認識に至った理由を聞いている。

*答えはないし、期待もされていない。

(4) 第3の質問

- ①抽象から具体的な質問へ。
- ②罪に定めるのではなく、告白を導く質問。

(5) アダムの回答

①単純な告白ではない。

*間接的に神の責任を問う。

*間接的にエバを責める。

*犯罪者が被害者になる。

②認罪は、文章の最後に来ている。

③自分の責任を過小評価する。罪がアダムの性質を腐敗させている。

(6) 第4の質問。エバに直接問いかける。

(7) エバの回答

①蛇に責任をかぶせる。

②蛇にだまされたことを認める。

③「あなたが置いた」とか、「あなたが造った男は止めなかった」とか、言っていない。

④彼女の認罪も、最後に来ている。

結論

1. 人類の罪のルーツはここにある。

2. 霊的死という事実

(1) 人は罪を犯さないわけにはいかなかった。

(2) 自力救済は不可能である。

(3) エデン契約は破棄された。

(4) 新たにアダム契約が結ばれる。

①罪人を呼び戻す神。

②問題を解決するメシアの登場

*サタンを裁く。

*罪の問題を処理する。

*死の問題を処理する。

創世記8 創世記3章14節～24節

「アダム契約」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 創世記には11の区分(トルドット)がある。
- (2) 第1のトルドットには、人類の墮落とエデンの園からの追放が書かれている。
- (3) 第1のトルドットが終わりには、「非常によかった」ものがカオスになっている。
- (4) 墮落以降、神と人類の関係が変化していることに注目
 - ①最初の契約は、エデン契約(条件付契約)。
 - ②墮落後は、アダム契約が結ばれる(無条件契約)。
- (5) 創世記の記事は、神話や伝承ではなく歴史的事実である。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 前半：アダム契約
 - ①蛇に対して
 - ②サタンに対して
 - ③女に対して
 - ④アダムに対して
- (2) 後半：エデンの園からの追放
 - ①エバという名前
 - ②皮の衣
 - ③追放劇

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

(例話) エジプト入国の際に、カメラを持ち込むことができなかった話。

- (1) 私たちは何を失ったのか。
- (2) 私たちは何を回復しようとしているのか。
- (3) 私たちはどのような方法で、失ったものを回復しようとしているのか。

きょうのメッセージは、3つの疑問(2つの what と 1つの how)に答えようとするものである。

I. アダム契約(3:14～19)

1. 蛇に対して (14 節)

(1) サタンに悪用された。

①通常は、動物には道徳的責任はない。

②しかし、人間に対して害をもたらした場合はその結果が降りかかる。

創世記9：5、出エジプト21：28

(2) 人の墮落によって動物界に呪いが及んだ。

(3) しかし、蛇は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりも呪われた。

①腹ばいで歩く。その前は立って移動していた。足があったかどうかは、分からない。

②ちりを食べる。命令ではなく、宣言である。

③蛇はちりを食べない。これは、比喩的表現。

*呪われた状態(千年王国においても) イザヤ65：25、ミカ7：17

*敗北した敵 詩篇72：9、イザヤ49：23

2. サタンに対して (15 節)

(1) この聖句を「原福音」と呼ぶ。

(2) サタンと女の間には敵意を置く。

①神がそれを置く。神がその原因を作るということ。

②メシアは女から誕生するので、サタンと女の間には確執が存在するようになる。

(3) おまえの子孫と女の子孫の間には敵意を置く。

①「女の子孫」：この言葉は、最初のメシア預言。

*系図は普通男性のラインをたどるのに、なぜ「女の子孫」と呼ばれるのか。

*イザヤ7：14になって初めて分かる。

*超自然的な誕生。人間の父親のいない誕生。

*サタンは、人間の女たちを汚そうとする。創世記6：1～4

②「おまえの子孫」：サタンの子孫。反キリストのこと。

*同じ節に出てくるので、「子孫」の意味は同じ。超自然的な誕生。

*ダニエル9：26～27では、「やがて来るべき君主の民」となっている。

*ローマ系の婦人から誕生するある人物。

(4) 彼は、おまえの頭を踏みくだく。

①十字架の死と復活。すでに成就した事実。ヘブル2：14～18

②将来成就する出来事。ローマ16：20、黙示録20：10

(5) おまえは、彼のかかとかみつく。

①痛いのが致命的ではない。

②十字架の死のこと。

3. 女に対して (16 節)

(1) 「大いに増す」と言われるものが、2つある。

①月経の痛み (墮落の前にはなかった)

②みごもりの能力 (月に一度の月経のサイクル)

* 死の現実が入ってきたために、出産能力を増す必要がある。

(2) 苦しんで子を産む。

①墮落の前は、痛みのない出産があったことになる。

②この苦しみの中には、流産も含まれるだろう。

③恵みの要素は残されている。

* ヨハネ 16 : 21 出産後の喜び

* I テモテ 2 : 15 男性よりも下位であるとの認識からの解放。人類存続の要。

(3) 夫を恋い慕う。

①タシュカーという動詞 (旧約聖書に3回しか出て来ない)

②創世記 4 : 7 「罪はあなたを恋い慕っている」

③雅歌 7 : 11 「あの方は私を恋い慕う」

④ここでは、創世記 4 : 7と同じ意味。支配する、統治する。

* 助け手として造られた女が、夫に反抗し、夫を支配したくなる。

* 罪がカインを支配しようとするがごとくに。

(4) 夫は女を支配する。

①マシヤルという動詞。支配、統治。

②愛の関係で頭としての役割を果たすことではない。

③女は男を罪へといざなった。その結果、女は男に支配されるようになった。

4. 男に対して (17~19 節)

(1) アダムは、アダムの契約の当事者 (人類の代表)。

①彼は、頭としての使命に違反した (妻の声に聞き従った)。

②彼は、神の命令に違反して、禁断の木の実を食べた。

③現在の人間の問題は、アダムに責任がある。

(2) 土地がのろわれた。

①人の支配下にあった土地が呪われた (聖書の原則)。

②労働の苦痛。

* いばらとあざみは、呪いの象徴。

* サタンの裁きは、サタンの支配下にあったものの呪いにつながった。

*アダムのかきは、アダムのか配下にあつたものの呪いにつながつた。

ローマ8：20～23 自然界のうめき

(3) 食事

①野の草を食べる(この段階でも菜食主義)。

②ノア契約で、肉食が許可される。

③動物に関しては分からない。

(4) 労働の苦勞

①エデン契約では、労働は容易。

②墮落以降、額に汗を流す労働。

(5) エデン契約に違反したので、靈的な死が確定。

(6) アダム契約で、肉体的な死が宣言された。

①土(ちり)に帰る。ヨブ4：19、34：15、詩篇104：14、29、伝道3：20、12：7

②ローマ5：12～21、Iコリント15：20～23

④例外は、エノクとエリヤのみ。将来の例外は、携拳の時の聖徒たち。

II. エデンの園からの追放(創世記3：20～24)

1. エバという名前

(1) 墮落の前は、イシャー(女)

(2) ここでは、ハヴァー(エバ)

①命という意味

②アダムが女の上に權威をふるい、命名した。

③アダムは、創世記3：15を信じた。

④「それは、彼女がすべて生きているものの母であつたからである」

*「ハヤー」生きる。「ハイ」生きているもの。

*まだエバは子を生んでいない。完了形、預言的完了形。

*地に広がることは、今も有効な命令。

⑤ヘブル語が最初の言語であることが分かる。

2. 皮の衣

(1) 動物の命を殺して取るもの。神が用意したもの。

(2) 血が流れる。アダムとエバは初めて死を目撃し、自分たちの死を予感した。

(3) 血の犠牲の最初のもの。裁きの中に恵みの要素がある。

- (4) いちじくの葉から皮の衣へ
- (5) 霊的な教訓
 - ①神に近づくためには、それにふさわしい被いが必要である。
 - ②人間が作った被いでは不十分。
 - ③神ご自身が用意されたものでなければならない。
 - ④ふさわしい被いは、血を流すことによって得られる。
 - ⑤追放の前に、被いが用意されている。

3. 園からの追放

- (1) 追放の理由：人は神のようになった。自分で選ぶ。
- (2) 三位一体の神：「われわれのように」
- (3) 永遠に生きるとは、罪の状態で生き続けること。
- (4) その危険性を避けるために、園から追放される。
- (5) 人は土を耕すようになった。
- (6) 追放の2面性
 - ①地理的追放
 - ②霊的追放 シャカイナグローリーとの交わりの喪失
- (7) 園の見張り役
 - ①園の入り口は、東側。幕屋と同じ。
 - ②ケルビム(天使)と、「輪を描いて回る剣」(シャカイナグローリー)
 - ③いのちの木への道を守る。
 - ④シャカイナグローリーは、彼らを遠ざける役割を果たした。
 - ⑤この状態は、ノアの洪水まで続いた。

結論

- 1. 私たちが失ったものは、シャカイナグローリーの中での神との交わり。
- 2. 私たちが回復しようとしているものは、シャカイナグローリーの中で永遠に住まうこと。
- 3. 回復への道は、神が用意されたものでなければならない。
 - (1) 皮の衣
 - (2) 婚礼の礼服 マタイ 22 : 11
 - (3) 白い衣 黙示録 7 : 9 ~ 10
- 4. ペテロの宣言 使徒 4 : 12

「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです」

創世記9 創世記4章1節～16節

「カインとアベル」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 創世記には11の区分（トルドット）がある。
- (2) 第1のトルドットの内容
 - ①アダムの創造
 - ②エデン契約
 - ③エバの創造
 - ④墮落
 - ⑤アダム契約（無条件契約）
 - ⑥エデンの園からの追放
 - ⑦カインとアベル
 - ⑧カインの子孫（神から離れて歩む人々。アダム以降7代目まで）
 - ⑨セツの子孫（主の御名によって祈る人々）
- (3) 創世記の記事は、神話や伝承ではなく歴史的事実である。
- (4) がん哲学—始まりは小さい。時間がかかる。

2. メッセージのアウトライン

- (1) ユダ11
「ああ。彼ら（不信仰な人々）はカインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、
コラのようにそむいて滅びました」
- (2) カインは不信仰者の原型である。
- (3) カインの道の5つのステップを取り上げる。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 神から離れた人間の状態はどのようなものか。
- (2) 人類の希望はどこにあるのか。

このメッセージは、「カインの道」の5つのステップを確認し、人類が抱える問題の解決を探るものである。

I. 殺人(1~8節)

はじめに：1~8節は、「カイアズム」になっている。

- (1) カインの誕生、アベルの誕生
- (2) アベルの職業、カインの職業
- (3) カインのささげ物、アベルのささげ物
- (4) アベルのささげ物は受け入れられ、カインのささげ物は拒否される。
- (5) カインの怒り、アベルの死

1. カインの誕生、アベルの誕生

- (1) 「人は、その妻エバを知った」。「知った」とは、経験的知識、性的関係のこと。
- (2) 「私は、主によってひとりの男子を得た」
 - ①「得た」→「カニティ」という言葉。
 - ②「カイン」→「形作る」という意味。
 - ③同じ語幹ではないが、音が似ている。言葉遊び。
 - ④直訳は、「私は、男子(人)を得た、(エツト)ヤハウエ(主)を」
 - *エバの3章15節の理解が前提となっている。
 - *エバは、「女の子孫」を「神人」と理解しており、救い主が与えられたと考えている。
 - ⑤日本語(英語)の訳は、70人訳がベースになっている。
 - *「ディア・ツー・セウー」(神を通して)
 - *翻訳者は、必ずしも神学者ではない。
 - ⑥エバの創世記3:15の理解は正しいが、適用が間違っている。
 - ⑦カインは、「女の子孫」ではない。
 - ⑧しかし、カインの誕生は、最初の希望となった。
- (3) 「アベル」のヘブル語は、「ハベル」。
 - ①それには、「はかなさ、むなしさ、空虚、息」などの意味がある。
 - *ヨブ7:16、詩篇144:4
 - ②この段階で、罪の影響が深まり、アダムとエバはそれを実感するようになっている。
 - ③カインが「女の子孫」でないことが明らかになっている。

2. アベルの職業、カインの職業

- (1) アベルの職業：羊を飼う者。ミルク、衣服、犠牲の動物。
- (2) カインは、父アダムの職業に倣い農夫となっている。

3. カインのささげ物、アベルのささげ物

- (1) 「ある時期になって」→「ある期間(時期)の終わりに」

- (2) この時点で、すでに定期的なささげ物の時間が決まっていた。
- (3) これは、初めてのささげ物ではない。
 - ①それまでは、カインはアベルから羊かヤギを買ってささげていたはず。
 - ②カインが血のないささげ物をささげる最初のケース。
- (4) 今回は、地の作物から主へのささげ物を持ってきた。
 - ①「ささげ物」→「ミンハ」という一般的な用語。
 - ②これは、血がないので神に受け入れられない。
 - ③モーセの律法でも、穀物のささげ物は、血がともなわなければ受け入れられない。
- (5) これは、信仰のない「宗教的行為」である。
 - ①単なる義務感からの行為。
 - ②それは最高のもので、初穂でもない。
- (6) 「主のもとに献げ物として」(新共同訳) →決められた場所があった。
 - ①祭壇が出て来ないので、エデンの園の東側のシャカイナグローリーの場所か？
- (6) アベルのささげ物
 - ①初子の羊(血のささげ物)、最良のもの。
 - ②アベルにとっては、信仰の行為。
 - ③2人の態度の違いの問題なのか。そうではない。
 - ④血の犠牲かどうか。アベルの信仰について。ヘブル11:4、12:24。

4. アベルのささげ物は受け入れられ、カインのささげ物は拒否される。

- (1) 主はアベルのささげ物を受け入れた。
- (2) しかし、カインのささげ物は退けられた。

5. カインの怒り、アベルの死

- (1) カインは、怒った。顔を伏せた。
 - ①神の道を否定した。
 - ②自分の道が認められないので怒った。
- (2) 神の質問(答えを期待しない質問)
 - ①なぜ憤っているのか。
 - ②なぜ顔を伏せているのか。
- (3) 神の警告
 - ①「正しく行ったら」→ふさわしいささげ物を捧げたなら。
 - ②「受け入れられる」とは、「顔を上げられるはずではないか」という意味。
 - ③「正しく行っていないなら」→ふさわしいささげ物でないなら。
 - ④「罪」という言葉が初めて出ている。「ハタアット(女性形)」

*ライオンが待ち伏せするように、というイメージ。

*罪がカインを支配(タシュカー)するために、ライオンのように待ち伏せしている。

*3:16に、女が夫を支配しようとする姿が描かれていた。

*カインの責務は、それを治める(マシヤール)こと(3:16と関係がある)。

(4) 殺人が行われる。

①カインはアベルを人目につかない所に誘った。

②最初の殺人であり、兄弟殺し。

③アベルの死は、義人の死。マタイ 23:35、ルカ 11:51、Iヨハネ 3:12

II. 嘘(9~12節)

1. 神の質問。「あなたの弟は、どこにいるのか」

(1) 告白を導くための質問

2. カインの答えは、「知りません」。

(1) これは、人類史上最初の嘘。

(2) カインは自分の答えを複雑なものにしている。

①「私は、自分の弟の番人なのでしょうか」

②神の質問は的を射ていないとの反論である。

3. 神の糾弾のことば。

(1) 「あなたは、いったいなんということをしたのか」

(2) 「聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる」

①「血」という言葉が、初めて出てくる。

②それが弁護を求めている。

(3) 土地はのろわれている。

①カインが住む地、農業を営む地。

②土地が口を開くという例

*民数記 16:33~35、申命記 11:6、詩篇 106:17

*モーセに反抗したエリアブの子ダタンとアビラム、それにコラに属する者たち

*イザヤ 5:14

4. カインの裁き

(1) 土地は力を生じない。弟の血が土地から神に上るように、呪いはカインに上る。

- (2) カインは、地上のさすらい人になる。
- (3) ノア契約までは、死刑はない。創世記9：6

Ⅲ. 自己憐憫 (13～15 節)

- 1. アダムは、エデンの園から追放されても文句を言わなかった。
- 2. カインは、文句を言う。
 - (1) 「私の咎は、大きすぎて、にないきれません」
 - ① 罪の認識がある。
 - ② 神の裁きの認識がある。
 - (2) 農業を営む力が取り去られた。
 - (3) 神との交流がなくなる。
 - (4) さすらい人、遊牧民となる。
 - (5) 他の人に殺されるでしょう。
 - ① この時点で、人間の数は増えている。
 - ② すべてアダムとエバの子孫 (創世記5：4)。
 - ③ 自分がアベルを殺したので、他の人に殺されるという恐怖心。
- 3. 主の回答
 - (1) 「それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける」
 - ① 7は完全数
 - ② ここでカインは、神の守りを受けている。恵みである。
 - (2) カインのしるし
 - ① なんであるかは分からない。しかし、見えるもの。
 - ② ユダヤ教のラビの意見
 - * 名前の1文字
 - * 4文字
 - * ツアラアト (皮膚病)
 - * 番犬
 - * 角

Ⅳ. 神からの分離 (14～16 節)

1. 「主の前から去って」→遍在の神から去ることはできない。
 - (1) 主に出会う特定の場所のこと。
 - (2) シヤカイナグローリーのあるエデンの園の東。

2. 「ノデの地」、「ノド（さすらい）の地」（新共同訳）

3. 「エデンの東」とは、目に見える神の臨在から東の方に遠のくこと。

V. 世的な方法で自分を守る（17節）

1. 町を建てている。
 - (1) 神の命令に違反する行為。
 - (2) 子どもの名前（エノク）を町の名前にする。

結論

1. カインとアベルは、ともに罪人であった。
2. ともにエデンの園の外で生まれた。
3. ともに同じ両親から生まれ、育てられた。
4. カインのささげ物は、信仰によるものではなかった。
5. アベルのささげ物は、啓示に応答する信仰によるものであった。
6. 2代目カインの流れは、7代目レメクにたどり着く。神を離れた生き方の象徴。
7. アベルで途絶えた霊的な流れは、セツから再度始まっていく。
8. あなたは、カインの流れに合流するのか、セツの流れに合流するのか。

創世記10 創世記4章17節～26節

「レメクとセツ」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 創世記には11の区分（トルドット）がある。
- (2) 今回で、第1のトルドットが終了（2：4から始まった）
 - ①人類の創造
 - ②墮落
 - ③エデンの園からの追放
 - ④カインとアベル
 - ⑤カインはエデンの東、「ノデの地」、「ノド（さすらい）の地」（新共同訳）に住んだ。
- (3) 創世記の記事は、神話や伝承ではなく歴史的事実である。
- (4) がん哲学—始まりは小さい。時間がかかる。

2. メッセージのアウトライン

- (1) カインの道（神に背を向けて生きる人々）
 - ①エノク
 - ②イラデ
 - ③メフヤエル
 - ④メトシャエル
 - ⑤レメク
- (2) セツの道（神とともに生きる人々）
 - ①アベルは死んだ。
 - ②その代わりとしてセツが誕生した。
 - ③セツはエノシュが生まれた。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 2つの道の存在
- (2) カインの道は広いが、セツの道は狭い。
- (3) では、あなたはどちらの道を選ぶか。

このメッセージは、2つの道の存在を確認し、セツの道を選ぶように決断を迫るものである。

I. カインの道

1. カイン（16節）

- (1) 「主の前から去って」→遍在の神から去ることはできない。
- (2) 主に出会う特定の場所のこと。シャカイナグローリーのあるエデンの園の入り口。
- (3) 「ノデの地」、「ノド（さすらい）の地」（新共同訳）
- (4) 「エデンの東」とは、目に見える神の臨在から東の方に遠のくこと。

2. エノク（17節）

- (1) カインの妻は、アダムとエバから生まれた女性。
 - ①妹、姪、あるいは又姪。
 - ②モーセの律法が与えられるまでは、これが許されている。
- (2) エノク（ハノク）：奉献という意味。ハヌカの祭りと同じ言葉。
- (3) カインは、町を建てていた。これは神の命令に違反している。
- (4) その町は、エノクと呼ばれた。

3. イラデ（18節）

- (1) イラデ：町の人という意味。
- (2) 町、都市は、神に敵対する文化が育つ場所。

4. メフヤエル（18節）

- (1) メフヤエル：神は私を生かしてくださるという意味。
- (2) カインの系図の中にも神を信じる者がいる。

5. メトシャエル（18節）

- (1) メトシャエル：神の人という意味。
- (2) 彼もまた、神を信じる人。

6. レメク（18～24）

- (1) アダムから7代目。
- (2) レメク：兵士、征服者という意味。
- (3) ふたりの妻をめとった。
 - ①アダ：装飾、飾るという意味。
 - ②ツイラ：きらきら輝くという意味。

- ③彼女たちの名前は、性的快楽を示唆する。
- (4) アダの息子たち
 - ①ヤバル：作り出す人という意味。
 - *遊牧民の先祖。ベドウィンの生活。町から出た。
 - *アベルは定住の羊飼。ヤバルは遊牧の羊飼。
 - ②ユバル：作り出す人という意味。
 - *立琴と笛を奏する者の先祖。
- (5) ツィラの息子と娘
 - ①トバル・カイン：制作力を得た人という意味。上の2人と同じ語源の名前。
 - *青銅と鉄のあらゆる用具の鍛冶屋。
 - ②ナアマ：みめ美しいという意味。
 - *女性が系図に出てくるのは、珍しい。なんらかの理由があったものと思われる。
- (6) 彼らは、人間に降りかかった呪いを和らげるために、新しい物を作り出した。
- (7) 妻たちに対するレメクの歌 (23~24 節)
 - ①聖書の中の最初の歌。
 - ②神に反抗する歌。
 - ③3つの対句からなっている。対句はヘブルの詩の特徴。
 - *妻たちへの呼びかけ。
 - *自分の力を誇る。必要以上に暴力を振るう。
 - *レメクの復讐は、カインの10倍。神の守りよりも、自分で自分を守る。
 - *イエスは、「7度を70倍するまで赦せ」と教える (マタイ 18:22)。

7. アダム以降7代目までの系図

- (1) カインが最初の「がん細胞」となった。
- (2) 人類の文化の発展が、神の意図とは別の方向に進む。
 - ①都市生活
 - ②遊牧生活
- (3) 産業の発展
 - ①牧畜。ミルク、衣服。
 - ②鍛冶屋。
 - ③音楽
- (4) 一夫多妻
- (5) 文字を書く能力
- (6) 詩を作る能力

II. セツの道 (25～26 節)

1. セツ：定める。土台という意味

(1) エバが命名している。

(2) 新しい家系の土台となる。

「カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから」

(3) 「もうひとりの子」

① 「子」とは「種」という言葉。

② 創世記3：15の「女の子孫」と同じ言葉。

③ アベルに代わる息子。「女の子孫」を輩出する家系。

④ エバは霊的に成長し、神の計画を理解するようになっている。

2. エノシュ：朽ちる人という意味

(1) 詩篇103：15

「人の日は、草のよう。野の花のように咲く」。ここでの人は、エノシュ。

(2) 「主の御名によって祈る」

① 霊的覚醒があった。

② 定期的な公の礼拝の始まり。

③ セツの道が顕在化してくる。

結論

1. 2つの道は聖書を貫く一大テーマ

2. セツの道

(1) エノク（生きたまま天に上げられた人）

(2) ノア

(3) アブラハム

(4) モーセ

(5) イエス・キリスト（マタイ7：13～14）

「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです」

創世記11 創世記5章1節～32節

「セツの流れ」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 創世記には11の区分（トルドット）がある。
- (2) 創世記5：1～6：8 第2のトルドット
- (3) 「セツの流れ」、「女の子孫（種）」、「約束の子孫（種）」の流れを追っていく。

2. メッセージのアウトライン

- (1) アダムから10代の家系を追う。
- (2) すべてヘブル語。バベル事件の前は、ヘブル語が共通の言語。
- (3) この系図の中には欠落はない。
 - ①「生んだ」という言葉以外に、年代が入っている。
 - ②年そのまま年である。
- (4) 定型の文書形式がある（フォーマット）。
 - ①何歳で「約束の子孫（種）」を生んだか。
 - ②その子の命名。
 - ③それから何年生きたか。
 - ④息子、娘たちを生んだ。
 - ⑤何歳で死んだか。
- (5) 例外が4人いる。
 - ①初代のアダム
 - ②7代目のエノク
 - ③9代目のレメク（ノアに関する彼の言葉）
 - ④10代目のノア
- (6) メッセージのアウトラインは10あるが、強調するのは、4人。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 旧約聖書と新約聖書のつながり
- (2) アダム契約の呪いの広がり、人類の罪の広がり
- (3) 神の恵みの進展

このメッセージは、罪人を救おうとする神の愛と恵みの素晴らしさを確認しようとするものである。

イントロダクション（5：1～2）

1. 新しいトルドットの始まり。アダムのその後、子孫たちの歴史。
2. 「セフェル」という言葉が初めて登場。
 - (1) 新共同訳 「これはアダムの系図の書である」
 - (2) トルドットは、個別に記録された書。モーセは基本的には編集者である。
 - (3) 「セフェル」という言葉が出てくるのは、11のトルドットの中ではここだけ。
 - (4) 創世記5章とマタイ1：1～17 書き始めが同じ
 - ①ノアの系図の後にノアの物語。イエスの系図の後にイエスの物語。
 - ②メシアであるイエスは、最後のアダムである。
3. この箇所は、第1のトルドットの要約である（2：4～4：26）
 - (1) 「アダムを創造されたとき」 第6日
 - (2) 「神のかたち」が、アダム以降の世代にどのように継承されたのか。
 - (3) 男と女とに彼らを創造された。
 - (4) 神は彼らを祝福された。エデン契約の祝福。
 - (5) 「アダム」とは、固有名詞ではなく人類のこと。「彼らを祝福して」（複数形）。

I. 3～5節 アダム（ここでは、固有名詞として使われている）

1. 定型のフォーマット
 - (1) 130年生きて、子を生んだ。「約束の種」、「女の種（子孫）」の系列。
 - (2) セツと命名した。
 - (3) それから800年生きた。
 - (4) 息子、娘たちを生んだ。
 - (5) 930歳で死んだ。
2. 非定型の要素
 - (1) 「神のかたち」ではなく、「彼のかたち」になっている。
 - (2) 人は「神のかたち」を保持している。
 - (3) と同時に、アダムの墮落した性質を相続するようになる。

II. 6～8節 セツ（基礎という意味）

III. 9～11節 エノシュ（壊れやすい、人間性）

IV. 12～14節 ケナン(鍛冶屋)

V. 15～17節 マハラエル(神をたたえる)

VI. 18～20節 エレデ(守る、防御する)

VII. 21～24節 エノク(奉献)

1. 定型のフォーマット

- (1) 65年生きて、子を生んだ。「約束の種」、「女の種(子孫)」の系列。
- (2) メトシェラと命名した。
- (3) それから300年生きた。
- (4) 息子、娘たちを生んだ。
- (5) 365歳でいなくなった(エノクは、最短で地上を去った)。

2. 非定型の要素

- (1) エノクとレメクは、カインの系図にも登場するが、別人である。
- (2) エノクは神とともに歩んだ。
- (3) エノクは、メトシェラを生んで後、神とともに歩み始めたようである。
- (4) 彼は、父のエレデよりも先にいなくなっている。
- (5) 「神とともに歩んだ」は「ヒッツハレッフ」
 - ①創世記3:8 「園を歩き回られる神」
 - ②「歩き回る」は、交わりを強調する言葉。
 - ③忠実な僕の奉仕も意味する。
- (6) ユダ14、15節は、エノクが預言者であり、義なる主の僕であることを教えている。
- (7) 「いなくなった」は「ヴェエネヌ」。
 - ①消えたという意味。彼は、天に上げられた。
 - ②ヘブル11:5

3. エノクは、恐らくアダムから7代目のレメクと同世代であろう。

- (1) ふたりは、対象的な人格。
- (2) 神に敵対するレメクと、神とともに歩むエノク。

VIII. 25～27節 メトシェラ(槍の人、「彼が死ぬとそれは送られてくる」という意味)

1. 定型のフォーマットに戻っている。

2. しかし、注目すべき点がある。

- (1) 彼の名は、預言的な名になっている。その死とともに洪水がやって来る。
- (2) 父親のエノクは、預言者として活動していた。
- (3) メトシェラが死んだ年に、洪水が襲っている。
- (4) 彼の生涯は、965年。最も長寿。これは神の恵みを表している。
- (5) 彼が生きている限りは、洪水はこない。悔い改めの期間。
- (6) IIペテロ3:8、9は、神の忍耐を教えている。
- (7) 彼が850歳の頃、ノアは箱舟を作り始めている。

IX. 28～31節 レメク(兵士 征服者)

1. 定型のフォーマット

- (1) 182年生きて、子を生んだ。「約束の種」、「女の種(子孫)」の系列。
- (2) ノアと命名した。
- (3) それから595年生きた。
- (4) 息子、娘たちを生んだ。
- (5) 777歳で死んだ。

2. 非定型の要素

- (1) 「主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、この手で苦勞しているが、この私たちに、この子は慰めを与えてくれるであろう」
- (2) ノアの意味は、慰め。慰めるは「ナハム」
- (3) アダム契約呪いから慰められる。
- (4) 彼は、ノアをメシアと間違えた。エバがカインをメシアと間違えたのと同じ。
- (5) 彼はノアを特別な人物であると判断したが、その適用が間違っていた。
- (6) レメクは息子、娘たちを生んだ。ノアの兄弟、姉妹たち。何人かは洪水で死ぬ。

X. 32節 ノア

1. 「ノアが五百歳になったとき、ノアはセム、ハム、ヤペテを生んだ」
2. 500歳で、3人の息子がいたという意味。
 - (1) セム(名前)
 - (2) ハム(熱い)
 - (3) ヤペテ(美しい、美)

結論

1. アダムから洪水までは、1656年。
2. 「約束の種」はすべて洪水の前に死んでいる。
3. アダムの死は930年、それはレメクが56歳の時。
 - (1) レメクはノアの父。
 - (2) アダムとレメクは、伝承の側面からは、1世代しか離れていない。
 - (3) アダムとノアは、2世代しか離れてない。
4. ローマ5：12の原則が成就している。例外はエノクだけ。
5. 創世記3：4はサタンの嘘であったことが明らかになった。
6. これらの人物は、歴史的に実在したと、旧新約は認めている。
 - (1) I 歴代1：1～4
 - (2) ルカ3：36～38
7. 神は、「約束の種」を守り、その記録を残された。
8. 私たちの神は、忍耐する神である。

チャート1 アダムの系図

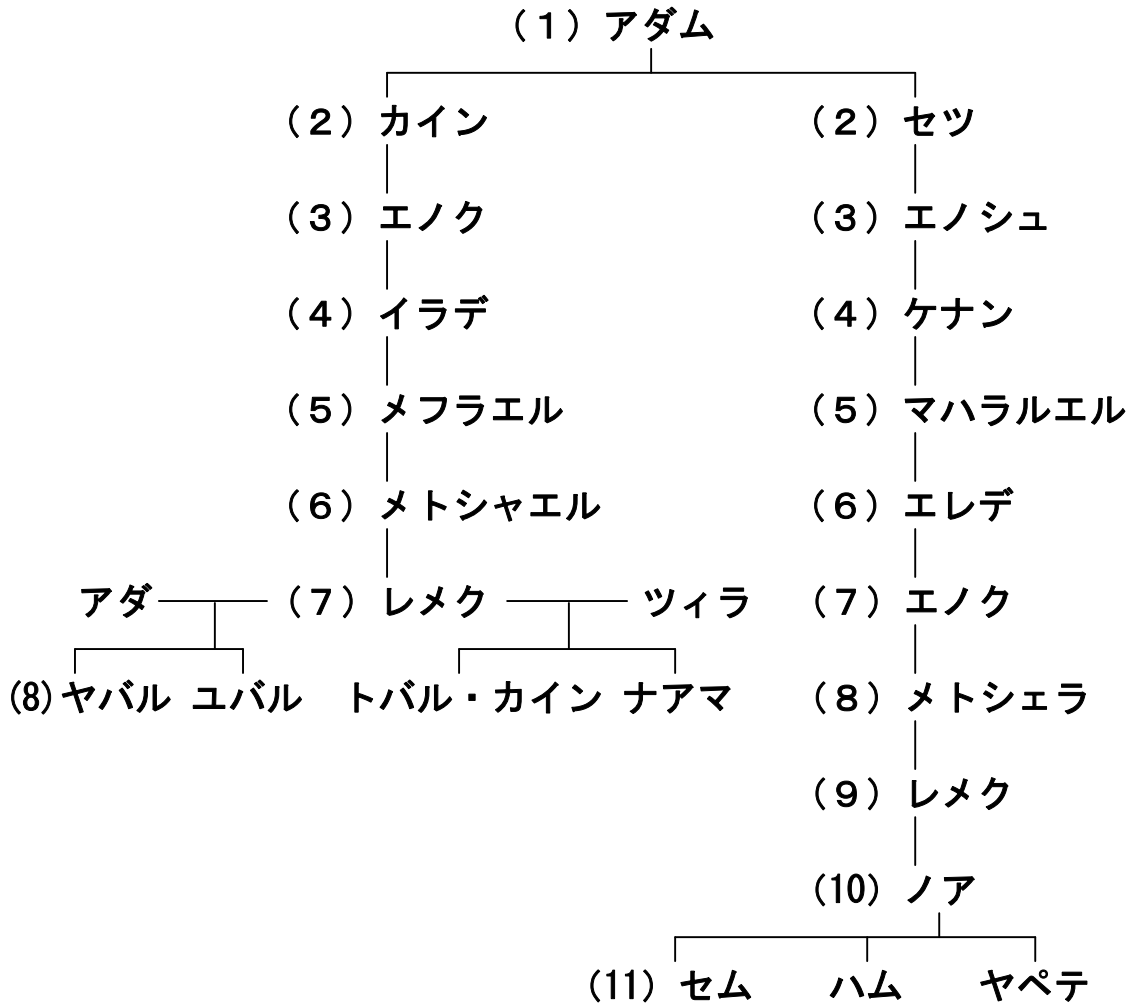


チャート2 アダムからノアまでの年数一覧表

名 前	誕生の年	息子誕生の 時の年齢	息子誕生 以降の年数	死亡 年齢	死亡の年
アダム	1	130	800	930	930
セツ	130	105	807	912	1042
エノシュ	235	90	815	905	1140
ケナン	325	70	840	910	1235
マハラルエル	395	65	830	895	1290
エレデ	460	162	800	962	1422
エノク	622	65	300	365	987
メトシエラ	687	187	782	969	1656
レメク	874	182	595	777	1651
ノア	1056	(500)	450	950	2006
洪水	1656	(600)			

創世記12 創世記6章1節～8節

「洪水の背景」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 創世記には11の区分（トルドット）がある。
- (2) 創世記5：1～6：8は、第2のトルドット。
- (3) 第2のトルドットの前半 アダムから10代目のノアまで。
- (4) 後半、「洪水が起こった理由」

2. メッセージのアウトライン

- (1) 雑婚の内容
- (2) 神の反応
- (3) 雑婚の結果
- (4) 神の介入
- (5) 恵みの要素

3. 悪霊に関する予備知識

- (1) 自由に活動する悪霊たち
- (2) 「底知れぬ所（穴）」（アブソス、英語でアビス）に閉じ込められている悪霊たち
 - ①ルカ8：31
 - *レギオンが「底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんように」と懇願している。
 - ②黙示録9：1、2、11、11：7、17：8、20：1、20：3
- (3) 「暗やみの穴」（タータラス）に閉じ込められている悪霊
 - ①Ⅱペテロ2：4～5
 - ②シオールの中にある永遠に悪霊どもを閉じ込めておく場所
 - ③悪霊は、ここから出ることなしに、白い御座の裁きを受け、火の池に投げ込まれる。
 - ④洪水の前にある特定の罪を犯した墮天使たち。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 悪霊の存在とその働き。
- (2) ノアの洪水が起こった必然性。
- (3) 裁きの中に働く神の恵み。

このメッセージは、「ノアの洪水」が起こった必然性と、そこに働く神の恵みについて学ぼうとするものである。

I. 雑婚の内容

1. 1節：人類（アダム）の広がり

- (1) 人類全体、男女含む。
- (2) この「アダム」をカインの家系に限定することはできない。
- (3) 5章は男性に焦点を合わせ、6章は女性に焦点を合わせる。

2. 2節：通常解釈

- (1) 不信仰の系列と信仰の系列の雑婚と見る。
- (2) それには疑問が伴う。
 - ①神の子ら（セツの系列）の男と、人の娘（カインの系列の女）の結婚だけしかない。
 - *通常は、それとは逆のケースもあり得る。
 - *例として：信者の男性と未信者の女性、未信者の男性と信者の女性
 - ②人間の雑婚という解釈は、教会教父から始まった。アウグスチヌス。
 - ③ヘブル語で、「神の子ら」とはどういう意味なのかを考える必要がある。
 - ④文脈は、洪水が必然的なものであったことを説明しようとしている。
 - *洪水の原因は、不自然な出来事、極めて異常な出来事が起こったことにある。

3. ここでの雑婚とは、墮天使と人間の女との雑婚である。

(1) 「神の子ら」（ベネイ・ハエロヒム）

- ①常に天使を指す。
 - ②良い天使も墮天使も。ヨブ1：6、2：1、38：7。
 - ③力ある者の子ら（ベネイ・エイリム）。これも天使を指す。詩篇29：1、89：6。
 - ④いと高き方の子ら（ベネイ・エルヨン）。これも天使を指す。詩篇82：6
 - ⑤神の子（バル・エロヒム）（アラム語）。これも天使を指す。
- (2) この解釈を嫌う人は、例外規定を設けるが、合理的な理由がない。
 - (3) 天使は、神によって造られたので、「子ら（sons）」と呼ばれる。
 - (4) 新約聖書に入ると、「神の子」は天使以外も指すようになる。
 - ①ルカ3：38 アダム
 - ②ヨハネ1：12 信者のこと。
 - ③新約聖書の例でも、神によって直接作られたという要素は残っている。
 - ④例外はイエス・キリスト。「そのひとり子」。永遠に存在している。

(5) これは、昔からあるユダヤ人の解釈である。

① ヨセフス「ユダヤ古代史」(1:73)で「天使」と解釈している。

*英語版ヨセフス全集の脚注に、この解釈は古代世界では一貫していたとある。

② クムランの書の中の3書

③ エノク書(偽典)

(6) 「人の娘たち」とは、人間の女性。カインの系列も、セツの系列も含む。

(7) 「いかにも美しい」 性的ニュアンス、罪の思い。

(8) 「好きな者を選んで」 墮天使と人間の雑婚。

4. 天使は結婚するのかという疑問

(1) マタイ22:30 「天の天使たち」とは、良い天使たちのことである。

(2) 創世記6章は、墮天使たちのことである。

(3) 人間も、天においては結婚しないが、地上では結婚する。

(4) 天使には性別がないのか?

① 天使が目に見える形で現れた場合は、常に若い男性。

*創世記18:1~19:22、マルコ16:5~7、ルカ24:4~7、使徒1:10~11

② 天使は常に男性形で表現される(女性形でも、中性形でもない)。

③ 天使は霊体を有する。

④ 天使には、出産能力がない。

⑤ 天使は天使を生まないが、ここでは超人間的なものを生んでいる。

5. どうしてサタンはこのようにしたのか。

(1) 創世記3:15 「女の子孫(種)」

① サタンに向かって語られた言葉である。

② サタンは、人間の女のかたちを破壊し、「女の子孫」の誕生を妨害しようとした。

(2) 創世記3:6との比較

① 見た、美しかった(良かった)、取った。

② アダムとエバは、神と人の垣根を越えた。

③ 墮天使たちも、同じようにして、人と天使の垣根を越えた。

④ 「いかにも美しいのを見て」とは、性的欲望を示す言葉。

II. 神の反応(3節)

1. 「わたしの霊」 創世記6:3に聖霊への言及が出てくる。神の三位一体性を表す。

2. 人間は肉、永遠に生きることはない。

3. 120年、洪水までの期間

(1) 神は120年間、人が悔い改めることを待たれた。

(2) I ペテロ 3 : 20

「昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです」

III. 雑婚の結果（4節）

1. ネフィリム 巨人ではない。超人のこと。

2. LXXの訳はgigentes（ギゲンテス 英語のジャイアンツの語源）。

(1) ギゲンテスとは、タイタンのこと。神と人の子ども。超人である。

(2) LXXがネフィリムをギゲンテスと訳したために、巨人という理解が生まれた。

(3) 民数記 13 : 33。スパイの虚偽報告。

「そこで、私たちはネフィリム人、ネフィリム人のアナク人を見た。私たちには自分がいなごのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう」

3. ネフィリムは、洪水によって滅びた。

4. 創世記とギリシア神話の比較

(1) 実際に起こったこと、それを基に作られた歪められた話。

(2) 創世記で否定的に描かれていることが、ギリシア神話では肯定的な物語となる。

(3) 洪水の目的は、雑婚をした墮天使たちと女たち、そこから誕生した超人を滅ぼすこと。

5. 新約との関係

(1) II ペテロ 2 : 4～5 あるグループの天使の幽閉

「神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。また、昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました」

①タータラス（暗闇の穴）は、アブソス（アビス）（底知れぬ所）とは異なる。

②墮天使は、そこから出るこなしに白い御座の裁きを受け、火の池に投げ込まれる。

③同じ悲劇が起きないように、これらの墮天使たちを幽閉しておく必要があった。

④ 墮天使たちの裁きのタイミングは、洪水が起こった時。

(2) ユダの手紙6～7節

「また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています」

① 雑婚によって人間の領域に入り込んだ。

② 「暗やみの下」(タータラス)に閉じ込められている。

③ 大いなる日の裁き 白い御座の裁き

④ ソドムとゴモラの罪 性的罪

* 不自然な肉欲 同性愛

* 墮天使が人間の女性に対して抱いた不自然な肉欲

IV. 神の介入(5～7節)

1. 罪の拡大のゆえに、裁きが必要。

2. 「ご覧になった」とは、神の評価。

(1) 外側の罪

(2) 内側の罪 意図的、自覚的な罪。

(3) 「計る」(5節)は、「ヤツァー」

① 創世記2:8 神は人間をデザインして造られた。

② 人間は、神から与えられた賜物を、悪をデザインするために用いた。

3. 神の悔やみ

(1) Iサムエル15:11

「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ」それでサムエルは怒り、夜通し主に向かって叫んだ。

(2) Iサムエル15:29

「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔いることもない。この方は人間ではないので、悔いることがない」

(3) これは矛盾ではない。擬人法。

① 神は悔いることがない。人の目にはそのように見えるだけ。

② 神の人に対する態度は、従順か、不従順かで異なる。

4. 神の痛み

- (1) 消し去ろう。取り除くこと。
- (2) 人、家畜、はうもの、鳥。魚は出てこない。水による裁きだから、魚は生き延びる。
- (3) 神は残念に思われた。

V. 恵みの要素(8節)

1. 日本語訳比較

- 「しかし、ノアは主の前に恵みを得た」(口語訳)
「しかし、ノアは、主の心にながっていた」(新改訳)
「しかし、ノアは主の好意を得た」(新共同訳)

2. ノアは、周りにいた罪人たちのようには歩まなかった。

- (1) 彼には罪がなかったということではない。
- (2) 神はノアに恵みを与えた。

3. ノアの義とは、何か。

- (1) 神のことばを信じる信仰による義
- (2) ヘブル11:7

「信仰によって、ノアは、まだ見ていない事らについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました」

結論

1. ノアの洪水は、必然的に起こった。
2. しかし、ノアが選ばれたのは、必然ではなく、神の恵みであった。
3. ノアは神の恵み応答して、人類の歴史を再スタートさせる人物となった。
4. ノアは、いつの時代にも存在する「残れる者(真の信仰者)」の型である。
5. 私たちもまた、ノアのように「主の前に恵みを得た」のである。

創世記13 創世記6章9節～22節

「ノアに対する命令」

イントロ:

1. 前回までの復習

- (1) 「これはノアの歴史である」。第3の区分(トルドット)が始まる。
- (2) 第3のトルドットは、6:9～9:29。
- (3) モーセはトルドットを意識しながら、複数の文書を編集した。
- (4) 前回は、「洪水が起こる理由」について学んだ。
- (5) 今回は、「ノアに対する命令」について学ぶ。
- (6) このトルドットの構造: antithetical parallelism 対照対句法がある。

* 6:9～10がイントロダクション。

- A 6:11～13 神は人類を滅ぼすことを決意する。
- B 6:14～22 ノアは箱舟を造る。
- C 7:1～9 神は箱舟に入るように命じる。
- D 7:10～16 洪水が始まる。
- E 7:17～24 洪水が150日続く。山々が水で覆われる。
- F 8:1a 神はノアを覚えておられた。
- E 8:1b～5 洪水が150日後に引いていく。山々が現れる。
- D 8:6～14 地は乾き始める。
- C 8:15～19 神は箱舟から出るように命じる。
- B 8:20 ノアは祭壇を築く。
- A 8:21～22 神は人類を滅ぼさないことに決める。

2. メッセージのアウトライン

- (1) イントロダクション(ノアの霊性)
- (2) A 6:11～13 神は人類を滅ぼすことを決意する。
- (3) B 6:14～22 ノアは箱舟を造る。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 箱舟の歴史性
- (2) 箱舟とモーセのかごの関係
- (3) 箱舟と十字架の関係

このメッセージは、ノアの箱舟が私たちの信仰のあり方に教訓を与えていることを学ぼうとするものである。

I. イントロダクション：ノアの霊性（9～10節）

1. 「正しい人」

(1) ツァディク。義認、内面の義、救いなどの意味。

2. 「全き人」

(1) タミム。無垢な人の意味。外面的状態を指す。

(2) レビ1：3、10、3：1、6では、犠牲の動物に関して「傷のない」と訳されている。

3. 「その時代にあっても」

(1) 「時代（世代）」が複数形。これまでの10世代の中で最も義なる人。

4. 「正しい人」「全き人」とは、「主の前に恵みを得た」ことの結果である。

5. 「ノアは神とともに歩んだ」とは、神の命令に従ったという意味。

(1) 5：22～24 エノクと同じ。

(2) ヘブル11：7

「信仰によって、ノアは、まだ見ていない事らについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました」

6. 息子たち（10節）

(1) セム（名前）

(2) ハム（熱い）

(3) ヤペテ（美しい）

II. A 6：11～13 神は人類を滅ぼすことを決意する。

1. 神はノアに7回語りかけるが、ノアの応答は記録されていない。

2. 詩篇29篇 「主の声」が7回出てくる。

3. 「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている」

(1) 6：3 「人の齢は、120年にしよう」

(2) 120年が満ちたか、ここから120年が始まるか。

(3) その間に、食物を用意し、動物を集める。

4. 「地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ」。これが理由。

5. 「それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている」。これが神の意図。

(1) 「地は、神の前に墮落し」（シャハット）

- (2) 「彼らを地とともに滅ぼそうとしている」(シャハット)
- (3) 人は地を破壊したので、その人を神が破壊するということ。
- (4) IIペテロ3:6
「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました」

III. B 6:14~22 ノアは箱舟を造る。

1. 箱舟について(14節)

(1) ヘブル語でテイバー。エジプト語から借りたもの。船ではなく、箱である。

- ①出エジプト2:3~6で、赤子のモーセが入れられたかご。
- ②モーセはエジプト語をよく知っていた。

(2) ゴフェルの木について

- ①どういう木なのか、分からない。

(3) 部屋について

- ①鳥の巣、部屋
- ②動物が入る部屋

(4) 「木のやに」について

- ①防水のためにこれを施す。
- ②通常のタールという言葉ではない。
- ③「カファー」。被い。贖い。
- ④これが、箱舟が物理的に沈まないようにする。
- ⑤イエスの血潮は、霊的に私たちを救う。

2. 箱舟のサイズ(15節)

- (1) 1キュビト(ひじから中指の先までの長さを基にした長さの単位)を45cmとする。
- (2) 長さ135m、幅22.5m、高さ13.5m
- (3) 床面積 $135 \times 22.5 = 3037.5 \text{ m}^2$ 920坪。総床面積2,760坪
- (4) 排水トン数4万3千トンくらいの船。つまり、4万3千トンを運ぶ能力がある。
- (5) 今日米国の鉄道で使用している家畜運搬車両550両に匹敵する。
- (6) 羊なら、13万頭も入れることができる。
- (7) 現在知られている種類によれば、実際の動物の頭数は3万5千頭から7万頭の間。

3. 天窓、戸、その他(16節)

- (1) 窓。「明り取り」のこと。日中に太陽の光を取り入れるために。
- (2) 中央に向かって傾斜した屋根を作る。
- (3) 屋根の立ち上がりの部分を1キュビト以内で水平にし、その下に空間を造る。
- (4) これが箱舟の屋根の周囲に出来る。

- (5) 光取り、換気のための窓となる。また、屋根があるので、雨が落ちてこない。
- (6) 扉を側面に作る。ひとつだけ。
- (7) 3階建て。各階4.5m。
- (8) 巨大な箱ができる。
 - ①航行目的ではなく、浮くことだけが目的。
 - ②転覆の危険性はない。90度近く傾いても、元に戻る。

4. 大洪水(17節)

- (1) 「大洪水」 ハ・マブール The Flood ノアの洪水だけを指す。
- (2) 旧約聖書では、詩篇29:10のみに出てくる。
- (3) 特別な洪水。全世界を覆った。
- (4) 新約聖書では、カタクルースモスという言葉。
マタイ24:39、ルカ17:27、Ⅱペテロ2:5、3:6

(5) 目的

- ①息をする動物と人間を滅ぼすこと。
- ②魚は含まれない。

5. 契約の予告(18節)

- (1) ノア契約の予告。内容は9章で明らかになる。
- (2) 「契約(ブリット)」という言葉はここで初めて出てくる。
- (3) ノア、息子たち、妻、息子たちの妻の順番

6. 動物(19~20節)

- (1) すべての動物を、2匹ずつ。
- (2) 鳥、動物、地をはうもの。種類に従って。
- (3) きよい動物は、7つがずつ、きよくない動物は、1つがずつ(7:2~3)
- (4) 神が超自然的に管理するので、動物たちは自分からノアのところに来る。
- (5) 今日の種類 7万5千種類
 - ①ヘブル語の種類とは、より大まか。つまり、7万5千種類以下ということ。
 - ②7万5千種類いたとしても、箱舟は60パーセントの占有。
 - ③成長した動物でなくても構わなかった。恐竜に関して。
 - ④残りの40パーセントのスペースは、昆虫、食物、居住空間。

7. ノアの仕事(21~22節)

- (1) 動物は自然に集まってくる。神の役割。
- (2) 食料を用意するのはノアの仕事。
- (3) 22節「ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った」
 - ①同世代の者とは異なり、彼は忠実であった。
 - ②ノアの忠実さは、7章で3度語られる。5、9、16節。

結論

1. ノアの箱舟は、歴史的なものである。
2. 箱舟とモーセのかごには類似点がある。
 - (1) 溺死から守られた者には、他の人に救いをもたらす使命がある。
 - (2) ノアは、人類に救いをもたらした。
 - (3) モーセは、イスラエルに解放をもたらした。
3. 箱舟と十字架には類似点がある。
 - (1) 救われた者には使命がある。

創世記14 創世記7章1節～24節

「洪水の始まり」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 第3の区分(トルドット)「これはノアの歴史である」
- (2) このトルドットの構造：antithetical parallelism 対照対句法がある。
 - A 6：11～13 神は人類を滅ぼすことを決意する。
 - B 6：14～22 ノアは箱舟を造る。
 - C 7：1～9 神は箱舟に入るように命じる。
 - D 7：10～16 洪水が始まる。
 - E 7：17～24 洪水が150日続く。山々が水で覆われる。
 - F 8：1a 神はノアを覚えておられた。
 - E 8：1b～5 洪水が150日後に引いていく。山々が現れる。
 - D 8：6～14 地は乾き始める。
 - C 8：15～19 神は箱舟から出るように命じる。
 - B 8：20 ノアは祭壇を築く。
 - A 8：21～22 神は人類を滅ぼさないことに決める。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 神は箱舟に入るように命じる。
- (2) 洪水が始まる。
- (3) 洪水が150日続く。山々が水で覆われる。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 洪水の内容
- (2) 洪水の普遍性
- (3) 洪水の預言的性格

このメッセージは、ノアの時代の洪水が普遍的なものであり、預言的性格を持っていることを確認しようとするものである。

I. C 7:1~9 神は箱舟に入るように命じる。

1. 「あなたと全家族」

- (1) 合計8人
- (2) 全人類の中で、ひと家族だけが義人(信仰による義人)。
- (3) 破壊から免れるための招き。
 - ①主イエスの招きも、これと同じ。
 - ②マタイ11:28

2. 動物

- (1) きよい動物 7つがい
- (2) きよくない動物 1つがい
- (3) 鳥 7つがい
- (4) モーセの律法の前から、きよい動物ときよくない動物の区別があった。
 - ①犠牲のささげ物は、モーセの律法の前からあった。
 - ②きよい動物とは、犠牲にも、食用にもなる。
 - ③少なくとも、牛、羊、ヤギが含まれる。
 - ④洪水の後、短時間に繁殖する必要のある動物。
 - ⑤食用、農耕のため。7つがい目は犠牲のささげ物となる。

3. 雨

- (1) 7日後に雨が降り始める。
- (2) これは、人類の歴史上初めての雨。
- (3) 雨は40日40夜降り続ける。
- (4) すべての生き物を地の面から消し去るため。
- (5) ノアの従順に注目。「ノアは、すべて主が命じたとおりにした」

4. 箱舟に入る。

- (1) ノアは600歳。
- (2) ノア、息子たち、妻、息子たちの妻が箱舟に入った。
- (3) まだ見ていない大洪水の大水を避けるため。
- (4) 動物の分類
 - ①きよい動物
 - ②きよくない動物
 - ③鳥
 - ④地をはうすべてのもの
- (5) 神が動物たちを集めた。

II. D 7:10~16 洪水が始まる。

1. 7日経って、大洪水が地上に起こった。
 - (1) 箱舟に入るために十分な時間。
 - (2) その時間を無駄にする余裕は与えられていない。
2. ノアの生涯の600年目の第2の月の17日。
3. 水源が2つある。
 - (1) 大いなる深淵の源(地下水源の水が溢れ出した)
 - (2) 天の水門
4. 洪水は何をもたらしているのか。
 - (1) 創世記1:6~7 2日目の創造が破壊される。
 - (2) 創世記1:2の状態に戻っていく。
5. 大雨は40日40夜地の上に降った。
 - (1) 地からの水はどうかは分からない。
 - (2) 恐らく、その後も溢れ出したのであろう。
6. ノアの家族は箱舟に入った。
 - (1) レメク(4:23)の場合は、一夫多妻。
 - (2) セツの家系では、一夫一婦。
 - (3) セツの家系で最初に複数の妻をめぐったのは、アブラハム。
7. 動物たちも箱舟に入った。
 - (1) あらゆる種類の獣
 - (2) あらゆる種類の家畜
 - (3) あらゆる種類の地をはうもの
 - (4) あらゆる種類の鳥
 - (5) 翼のあるすべてのもの(昆虫も含む)
8. 「それから、主は、彼のうしろの戸を閉ざされた」
 - (1) 回帰不能点を越えた。
 - (2) 神の守りが、残れる者(レムナント)のためにある。
 - (3) 箱舟の内には主の臨在があり、外には洪水があった。

III. E 7:17~24 洪水が150日続く。山々が水で覆われる。

1. 水かさが増し、箱舟を押し上げた。箱舟は地から浮かび上がった。
2. 水はみなぎり、地の上に大いに増し、箱舟は水面を漂った。
 - (1) 風が吹くままに流された。
 - (2) メソポタミア地方からアララテ山(ロシアの南部からトルコ)まで移動した。

3. 水は、いよいよ地の上に増し加わり。「メオッド、メオッド」
 - (1) 天の下にあるどの高い山々も
 - (2) すべて覆われた。
4. その上にさらに15キュビト増し加わった。
 - (1) 山の上にさらに6.6メートル
 - (2) 箱舟が山にぶつからなかったのは、そのためである。
5. すべての肉なるものと、すべての人が死に絶えた。
6. これは、地域的な洪水ではなく、全地を覆った普遍的な洪水である。
 - (1) そうでないなら、高い場所や、洪水が来ない地域に避難できた。
 - (2) これほど大規模な箱舟を造る必要はなかった。
 - (3) これほどの種類の動物を集める必要はなかった。
 - (4) 水が引くまでに要した時間を見よ。
 - ①水は、150日間、地の上に増え続けた。
 - ②地が渴くまでにさらに221日かかった。
 - (5) 神は、2度と洪水をもたらさないと約束された(8:21~22、9:11~17)。
 - ①地域的な洪水は起こっている。
 - ②しかし、普遍的な洪水は起こっていない。
 - (6) 現在の人類は、ノアの3人の息子から出ている。
 - (7) 聖書を知らない文化の中で、40以上のものが洪水物語を持っている。
 - (8) 聖書はこれを普遍的洪水と見ている。

ヨブ22:15~16、詩篇104:5~9、イザヤ54:9
マタイ24:39、ルカ17:27
ヘブル11:7、Iペテロ3:20、IIペテロ2:5、3:5~7
7. 洪水の預言的性格：IIペテロ3:5~7について
 - (1) 地は神のことばによって水から出て、水によって成りました。
 - ①創世記1:7~8 第2日目。
 - (2) そのようにして創造された地は、一度洪水によって滅ぼされました。
 - ①ノアの洪水への言及。神は裁きという形で超自然的に、有限な世界に介入された。
 - ②創世記1:2へ逆戻り。
 - (3) 今の天と地は、やがて火によって焼かれる。
 - ①神は再び、裁きをもって超自然的にこの世界に介入される。
 - ②今度は、水による裁きではなく、火による裁き。
 - ③これが起こるのは、大患難時代。

結論

1. 洪水の内容

- (1) 150日間水が増え続けた。
- (2) 箱舟の外に出るまでにさらに221日かかる。

2. 洪水の普遍性

- (1) 創世記1：7～8→創世記1：2へ

3. 洪水の預言的性格

- (1) 2日目の創造が洪水によって破壊された。
- (2) 今の天と地は、やがて火によって焼かれる。大患難時代。
- (3) キリスト教は、世界観であり、歴史観である。
 - ①時代を読んで、自分の立ち位置を確認する。
(例話) 死刑執行の現場はどうなっているのか。執行したことのある刑務官の証言。
 - ②私たちは、何を為すべきか。
 - *すでに箱舟は用意されている（イエスの十字架）。
 - *私の責務と、神の領域を区別する。

創世記15 創世記8章1節～22節

「洪水の終わり」

イントロ:

1. 前回までの復習

- (1) 第3の区分(トルドット)「これはノアの歴史である」
- (2) このトルドットの構造: antithetical parallelism 対照対句法がある。
 - A 6:11～13 神は人類を滅ぼすことを決意する。
 - B 6:14～22 ノアは箱舟を造る。
 - C 7:1～9 神は箱舟に入るように命じる。
 - D 7:10～16 洪水が始まる。
 - E 7:17～24 洪水が150日続く。山々が水で覆われる。
 - F 8:1a 神はノアを覚えておられた。
 - E 8:1b～5 洪水が150日後に引いていく。山々が現れる。
 - D 8:6～14 地は乾き始める。
 - C 8:15～19 神は箱舟から出るように命じる。
 - B 8:20 ノアは祭壇を築く。
 - A 8:21～22 神は人類を滅ぼさないことに決める。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 神はノアを覚えておられた。
- (2) 洪水が150日後に引いていく。山々が現れる。
- (3) 地は乾き始める。
- (4) 神は箱舟から出るように命じる。
- (5) ノアは祭壇を築く。
- (6) 神は人類を滅ぼさないことに決める。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 神の守りの確実性
- (2) 信仰と努力のバランス
- (3) 神のジレンマ(十字架の必然性)

このメッセージは、大洪水物語を通して、クリスチャン生活の本質を明らかにしようとするものである。

I. F 8:1a 神はノアを覚えておられた。

1. 「心に留める(覚えている)」の意味

- (1) 「忘れていない」ということではない。
- (2) 心に留めている対象に対する「行動」を指す言葉である。

2. 他の聖句の例

- (1) 創19:2 「神はアブラハムを覚えておられた」: ロトの救出についての言及
- (2) 出2:24 「神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた」: イスラエルの民の救出についての言及
- (3) エレ2:2 「さあ、行って、主はこう仰せられると言って、エルサレムの人々の耳に呼ばわれ。わたしは、あなたの若かったころの誠実、婚約時代の愛、荒野の種も蒔かれていない地でのわたしへの従順を覚えている」: エルサレムの救出についての言及
- (4) エレ31:20 「エフライムは、わたしの大事な子なのだろうか。それとも、喜びの子なのだろうか。わたしは彼のことを語るたびに、いつも必ず彼のことを思い出す。それゆえ、わたしのはらわたしは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない。——【主】の御告げ——」: エフライムに差し出された神の恵みについての言及
- (5) ルカ1:54~55 「主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです」: メシアをイスラエルの民に送るといふ約束についての言及

3. 契約関係を示す言葉

- (1) 「心に留める(覚える)」という言葉は、契約関係を前提として語られる言葉。
- (2) この時点では、ノア契約はまだ結ばれていない。
- (3) その預言は創6:18にある。「しかし、わたしは、あなたと契約を結ぼう」
- (4) 神はノア契約のゆえに、箱舟の中にいた人間と動物を守るために行動を起こされた。
- (5) 私たちはイエス・キリストにあって神と契約関係に入った。
- (6) それゆえ、神は私たちに「心に留め(覚え)」てくださる。

II. E 8:1b~5 洪水が150日後に引いていく。山々が現れる。

1. 地から水が引き始める。

- (1) 神が風を使ってそうさせた。

2. 8章1節の内容は、創世記1:2とよく似ている。

- (1) 創世記8章は、創世記1章~2章に記された「天地創造のテーマ」の再現である。

- (2) 渴いた土地が現れ、そこに植物が生長するというテーマ
- 3. 2節では、地下の水源が閉ざされ、天からの雨がとどめられている。
- 4. 3節では、水はしだいに地から引いている。
 - (1) 具体的には、150日の終わりに減り始めた。
 - (2) 水が蒸発によって減り始めた。
- 5. 4節では、箱舟はアララテ山の上にとどまった。
 - (1) 第7の月の17日
 - (2) 水位が相当下がった。
 - (3) アララテ山の標高は、5000メートル以上もある。
 - (4) 山頂にとどまったと考えなくてもよい。
- 6. 5節では、水は第10の月まで、ますます減り続けた。
 - (1) 第10の月の1日に、山々の頂が現れた。
 - (2) 最初は高い山々が、次に低い山々が姿を現している。

III. D 8 : 6 ~ 14 地は乾き始める。

- 1. ノアは、40日の終わりになって、箱舟の窓を開き、鳥を放った。
 - (1) 150日から数えて、40日後。
 - (2) 鳥は黒い色をした野鳥で、聖書では「きよくない鳥(汚れた鳥)」に分類されている。
 - ①レビ11:15、申命記14:14など参照。
 - ②ルカ12:24では、鳥は神によって養われている。
 - ③I列17:6では、鳥がエリヤに食物を運んでいる。
- 2. 「するとそれは、水が地からかわききるまで、出たり、戻ったりしていた」(新改訳)
 - (1) 鳥は、水の上に浮かんだ動物の死骸を食べて生きることができた。
 - (2) 洪水の後なので、あちこちに動物の死骸が漂っていた。
 - (3) 従って、箱舟に帰って来る必要はなかった。
 - (4) 鳥は、動物の死体の上に留まり、あちこち飛び回った。
- 3. 鳩を放った。
 - (1) 鳩は白い色をした飼育可能な鳥で、聖書では「きよい鳥」に鳥に分類されている。
 - (2) 鳩は、積極的なイメージを表現するために用いられている。
 - ①若い時の目の美しさ(雅歌1:15、4:1、5:12)
 - ②愛の象徴(雅歌2:14、5:2、6:9)
 - ③長距離を飛ぶ鳥(詩篇55:6、イザヤ60:8、ホセア11:11)
 - (3) ノアの行動
 - ①これまでノアは、神の啓示によって行動してきた。

②ここでは神からの語りかけがないので、普通の方法で状況を確認しようとした。

③神の啓示を通し、また、人間の方法を通して状況判断をするというバランス。

(4) 鳩は、水の上に浮かんだ動物の死骸を食べて生きることができない。

(5) また、鳥のように頂上を好むのではなく、谷に生息することを好む。

(6) 鳩が帰って来たことは、まだ水が地表を覆っていたことを示している。

4. 2度目に放った鳩

(1) 7日待って

(2) オリーブの若葉をくわえて帰って来た。

(3) 高地には水がなくなっていることが分かった。

5. 3度目に放った鳩

(1) なお7日待って

(2) 鳩は戻って来なかった。

(3) 谷間の地区も乾いた。

6. 地は乾いた。

(1) ノアの生涯の601年の第1の月の1日

(2) 箱舟のおおいを取り去り、外をながめると、地の面は乾いていた。

①おおいとは、箱舟の上にかぶせたものであろう。

②それでもノアは、さらに57日を箱舟の中で過ごし、神のことばを待った。

③第2の月の27日、地は渴き切った。

(3) ノアが箱舟の中にいた期間は、371日、ちょうど53週だった。

7. 私たちへの教訓

(1) 神の啓示と、自分の判断とのバランス

(2) 肝心な点においては神の指示を待つ。

IV. C 8:15~19 神は箱舟から出るように命じる。

1. 神の命令とノアの従順

(1) 箱舟に入れと神が言われた時、ノアはそれに従った(6:18)

(2) 今度は、箱舟から出よとの命令が下り、ノアはその命令にも従った。

2. ノアの家族、そして箱舟にいた鳥や家畜、地をはうものなどが出て来た。

(1) 大洪水を生き延びたこの少数の人々と生き物の群には、新しい使命が与えられた。

(2) 彼らは、新しくなった地に満ちるようにとの命令を受けた。

「…それらが地に群がり、地の上で生子、そしてふえるようにしなさい」

2. 大洪水は、バプテスマの型である。

(1) I ペテロ3:20~21

「…わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです。そのことは、
今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです」

(2) 私たちも、バプテスマという儀式を通過し、靈的に増え広がるように期待されている。

V. B 8:20 ノアは祭壇を築く。

1. 箱舟を出たノアが最初にしたことは、主を礼拝すること。
2. 彼は、祭壇を築いた。
 - (1) 「祭壇」という言葉が初めて登場する。
 - (2) 神の臨在が現れていたエデンの園は、洪水で滅びた。
 - (3) 神の臨在に出会う場として、また犠牲を捧げる場として、祭壇が必要になった。
3. すべてのきよい動物や鳥のうちから取り、祭壇の上で全焼のいけにえとして捧げた。

VI. A 8:21~22 神は人類を滅ぼさないことに決める。

1. 主は、再びこの地をのろうことはすまいと約束された。
2. その理由は、「人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ」というもの。
 - (1) かつては、これが地を滅ぼす理由となった。
 - (2) ここでは、それが地を滅ぼさない理由となっている。
 - (3) 大洪水は、神の義を示すために起こった。
 - (4) 人間が罪を犯すたびに大洪水が起こるなら、神は何度も同じことをせねばならぬ。
 - (5) これ以降は、神の憐れみと恵みが示される。
3. この祭壇と全焼のいけにえは、カルバリの丘の十字架を予表している。
 - (1) 究極的には、神は御子イエスの贖いの死によって、私たちを滅びから解放される。
 - (2) 神の義と愛が交差したところに、十字架が立つ。

結論

1. 神の守りの確実性
 - (1) 契約概念の理解
2. 信仰と努力のバランス
 - (1) 神とともに人生を作り上げていく。
 - (2) バプテスマを受けて以降の物理的、かつ靈的拡大。
3. 神のジレンマ(十字架の必然性)
 - (1) 神の義と愛が交差したところに、十字架が立つ。

創世記16 創世記9章1節～17節

「ノア契約」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 第3の区分(トルドット)「これはノアの歴史である」
- (2) 契約概念を理解することは極めて重要である。
- (3) これまでの契約

①エデン契約

②アダム契約

2. ノア契約の文脈

- (1) 神は、箱舟を出たノアとその息子たちを祝福された。
- (2) 新しい始まり。人類は、すべてアダムの子孫であり、ノアの子孫である。
- (3) ノアは、第2のアダムとして、全人類の代表として契約を結ぶ。創6：18の成就。
- (4) これはまた、動物界との契約でもある。
- (5) 人間と神とは新しい関係に入った。

①普遍的な洪水はない。

②次に来るのは、火による裁き(Ⅱペテ3：10)である。大患難時代。

2. メッセージのアウトライン

- (1) ノア契約の条項
- (2) ノア契約のしるし
- (3) ノア契約と新しい契約(新約)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 契約が神と私たちの関係を規定していることを学ぶ。
- (2) 新しい契約の時代に生きていることの意味を学ぶ。
 - ①礼拝に犠牲の動物を持ってくる人はいない。
 - ②私たちは、今はモーセの律法が機能していた時代とは違うことを知っている。

このメッセージは、聖書の契約概念について学ぼうとするものである。

I. ノア契約の条項(9：1～7)

1. 地に満ちよ。

- (1) アダムのようにノアは、人類の代表として立つ。
 - (2) エデン契約の条項の確認。創1:28
2. 動物の中に人への恐れを入れた。
- (1) これは、動物たちを守るためのもの。肉食が始まるから。
 - (2) 人は動物界に権威を持つ。
 - (3) 「地を従えよ」という命令はない。人類の墮落以降、サタンが地の支配者となった。
3. 人間の食事内容が変化した。
- (1) エデン契約と、アダム契約の下では、人間は菜食主義者であった。
 - (2) これ以降、2つの種類のものが許される。
 - ①動物。
 - * これまでは、動物は衣服、乳製品、犠牲のささげ物として有用。
 - * どの動物を食べてよいかという制限はない。動物にとっては、大変なこと。
 - ②緑の草。
 - * これは、エデン契約とアダム契約の条項の継続である。
4. 肉は血のあるままで食べてはならない。
- (1) 「肉のいのちは血の中にある」という原則。
 - (2) この規定は、モーセの律法に採用される。
 - * レビ3:17、7:26、27、申12:15、16、20~24
 - (3) 血を飲むことは、悪魔礼拝と関係がある。創6章への応答である。
 - (4) 後に、異邦人クリスチャンに適用される。
 - * 使徒15:29
5. 神の懲罰と人間の懲罰
- (1) 人間の懲罰：死刑制度の創設。
 - (2) そのためには、人間の政府の存在が前提となる。
 - (3) 「人間による統治の時代」に入った。
 - (4) 次は、創12章から「約束の時代」に入る。
 - ①ノア契約が破られたので、次の契約が結ばれる。
 - ②それがアブラハム契約。

II. ノア契約のしるし(9:8~17)

1. 契約としるしの関係

- (1) 「しるし」は、すべての契約にあるわけではない。
- (2) アブラハム契約では、割礼がしるしとなる(創17:11)。

(3) モーセ契約(シナイ契約)では、安息日がしるしとなる(出31:16、17)。

2. ノア契約のしるしは、虹である。

(1) ノアの洪水以前には、虹は出なかった。

(2) 神は虹を見て、ノア契約を思い出される。

(3) 虹。英語でレインボウ(雨の弓)。

(4) 虹。ヘブル語でケシュット。戦いの弓と同じ。

(5) 神は、戦いの弓を雲の中に置き、それを平和のしるしとされた。

III. ノア契約と新しい契約

1. ユダヤ教のラビたちの教え

(1) ノア契約から、7つの律法を導き出した。

(2) ユダヤ人はモーセの律法により、異邦人はノア契約の7つの律法によって救われる。

①ユダヤ教に改宗する方法以外の救いする方法である。

(3) ノア契約の7つの律法とは

①正義の追求。法廷の設立。社会的正義の追求。

②冒瀆。神の御名の冒瀆。

③偶像礼拝。天体や偶像を拝むこと。

④姦淫。

*姦淫

*近親相姦

*同性愛

*獣姦

⑤殺人(自殺も含む)

⑥盗み

⑦生きたままで動物を食べること。生きた動物から切り取られた肉を食べること。

(4) モーセの律法には、613の律法がある(命令と禁止)。

(5) ノア契約の7つの律法は、より詳細な形で613の律法の中に含まれている。

(6) ユダヤ教の考え方は、業による救いである(業によって祝福を勝ち取る)。

2. 神は私たちが裁きから救う方法を知っておられる。

(1) IIペテ2:5

「また、昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました」

3. 信仰と恵みによる救い

(1) ノアの信仰 ヘブル11:7

「信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました」

- ①彼は、雨も洪水も見たことがなかった。
 - ②彼の信仰は、箱舟建設によって示され、彼は信仰による義を獲得するものとなった。
 - ③彼の信仰は、世を罪に定めた。
- (2) 出エジプト記の過越の出来事 出12:13

「あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない」

- ①血がしるしとなって、裁きを免れた。
 - ②イスラエルの民の信仰は、血を塗るという行為によって示された。
- (3) 新しい契約 ルカ22:14~20

- ①信仰の内容は異なるが、救われるための原則は同じである。
- ②恵みの時代のテストは、私たちがイエスの十字架を信じるかどうかである。

結論

- 1. 契約が神と私たちの関係を規定している。
- 2. 今私たちは、新しい契約によって恵みに時代に置かれている。
- 3. この時代のテストは、私たちがイエス・キリストの十字架を信じるかどうかである。

創世記17 創世記9章18節～29節

「ノアの失敗」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 第3の区分（トルドット）「これはノアの歴史である」
- (2) これまでに確認したこと
 - ①ノアとその一家は、箱舟を造り、大洪水の中を生き延びた。
 - ②ノアとその一家は、箱舟を出た。
 - ③神は、ノアと契約を結ばれた。ノア契約。
 - *エデン契約、アダム契約に続く第3の契約
 - *ノア契約のしるしは、虹である。
 - *ノアは、人類の代表としてこの契約を結んだ。
- (3) きょうはノアの失敗について学ぶ。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 人類の新しい始まり
- (2) ノアの失敗
- (3) ノアの息子たちの反応
- (4) ノアの生涯のまとめ

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 誰であっても、必ず罪を犯したり、失敗したりする。
- (2) 誰であっても、救いを必要としている。
- (3) 救われる方法は、いつの時代でも同じである。

このメッセージは、ノアの失敗を通して、救いの本質について学ぼうとするものである。

I. 人類の新しい始まり（9：18～19）

1. セム、ハム、ヤペテ（誕生の順番 創5：32、6：10、7：13、10：1、I歴1：4）
2. ハムはカナン之父である。
 - (1) ハムの性質が、カナンに受け継がれる。
 - (2) 創12章以降、カナンが重要な役回りを演じることになる。
3. 洪水後、ノアには子どもが生まれていない。人類はノアの息子たちから広がった。

II. ノアの失敗(9:20~21)

1. ノアは、洪水後、新しい仕事を始める。
 - (1) ぶどう畑を作る農夫になった。
 - (2) ぶどう酒を作ること、飲むことは罪ではない。
 - (3) 結果が、罪である。酔うことは罪である。
2. ノアでも罪を犯す。
 - (1) 人間は、誰でも罪を犯す。
 - (2) 酔うことと、裸とは、往々にして関連付けられる(哀4:21、ハバ2:15)。
 - (3) この姿は、義人であり、神とともに歩んだノアとは別人のようである。
(例話) 1970年代のウォーターゲート事件とチャック・コルソンの回心

III. ノアの息子たちの反応(9:22~27)

1. ハムの行動
 - (1) 「父の裸を見て」
 - ①否定的な目で見ている。
 - ②陰部を、情欲の目を見た(同性愛ではない)。
 - ③バウンダリー(領域)の侵害である。
 - (2) 否定的な目の例
 - ①創19:26 ロトの妻
「ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった」
 - ②出33:20 神を見て、なお生きていることはできない。
「また仰せられた。『あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである』」
 - ③士13:22 マノアは、私たちは神を見たので必ず死ぬと言っている。
「それで、マノアは妻に言った。『私たちは神を見たので、必ず死ぬだろう』」
 - ④Iサム6:19 契約の箱の中を見たベテ・シェメシュの人たち5万70人が死んだ。
「主はベテ・シェメシュの人たちを打たれた。主の箱の中を見たからである。そのとき主は、その民五万七十人を打たれた。主が民を激しく打たれたので、民は喪に服した」
 - (3) ハムの罪の内容
 - ①見たこと。覆わなかった。
 - ②他の人に伝えた。父の墮落を言い広めた。
 - ③父をあざけたこと。
2. セムとヤペテの行動

- (1) うしろ向きに歩いた。
- (2) 裸を見なかった。
- (3) 着物で父の裸をおおった。

3. 呪いと祝福の言葉。創世記に記録されているノアの唯一の言葉。

4. カナンに下る呪い

- (1) 「末の息子」とは、若い方の息子のこと。ハムは真ん中の息子であった。
- (2) ハムの罪のために息子のカナンが呪われている。
 - ①カナンは、ハムの4番目の息子である。ハム自身が呪われたのと同じ。
 - ②彼は、父ハムと同じように行動した可能性がある。
 - *ラビの見解。カナンがノアの裸を見つけ、それを父ハムに伝えた。
 - ③また、彼の性格が父と同じものである可能性もある。
- (3) カナンはハムの性質を発展させた。カナン人の罪の重さ。

創15:16、18:20、21、19:4~10、レビ18:1~3、申12:29~31

- (4) 神の憐れみの要素がある。
 - ①ハムの罪は、4人の息子ではなく、カナンにおいてのみ裁かれた。
- (5) カナンは、兄弟たち(セムとヤペテ)の「しもべらのしもべ」となる。
 - ①I列9:20~21でそれが成就している。
 - 「すなわち、イスラエル人が聖絶することのできなかった人々の跡を継いで、この地に生き残った彼らの子孫を、ソロモンは奴隷の苦役に徴用した。今日もそうである」
 - ②カナン人たちは、イスラエル人の奴隷となった。
 - ③フェニキア人たちは、ペルシヤ人、ギリシア人、ローマ人の奴隷となった。
 - ④ポエニ戦争で、カルタゴ(北アフリカのフェニキア人の植民地)が滅ぼされた時、(前146年)に、カナン人の歴史は終わった。

5. セムに下る祝福

- (1) 「ほめたたえよ。セムの神、主を」。神がたたえられている。
- (2) セムは、真の神に関する知識を所有する。
- (3) 女の子孫は、この系図から出てくる。
- (4) カナンの子孫は、セムの子孫のしもべとなる。

6. ヤペテに下る祝福

- (1) 最も広い地域に広がる。アジアとヨーロッパ。
- (2) 「セムの天幕に住む」 セムと交わりを持つ。
- (3) ヤペテはユダヤ人を肉体的に征服するが、霊的にはユダヤ人がヤペテを征服する。
- (4) ヤペテは、ハムよりも多くセムの神を信じるようになる。
- (5) カナンはヤペテのしもべとなる。
 - ①フェニキア人たちは、ギリシア人、ローマ人の奴隷となった。

- ②黒人は呪いの中にあるという教えは、間違っている。
- ③ハムの息子の1人だけが呪われている。
- ④ハムの子孫は、アフリカ大陸に広がったが、エジプト人は黒人ではない。

IV. ノアの生涯のまとめ（9：28～29）

1. ノアの死
 - (1) 大洪水の後、350年生きた。
 - (2) ノアの一生は、950年であった。
2. 新約聖書の「ノアの日」について（マタ24：37～39、ルカ17：26～27参照）
 - (1) 「ノアの日」とは、「ノアの時代」という意味。
 - (2) 特徴は、神の裁きが近いのに、人々は大洪水の直前まで日常生活を営んでいたこと。
 - (3) これと似たような時代が再び到来する。
 - (4) それは、携挙が起こる直前の時代のこと。
 - (5) 携挙が起これば、大患難時代はすぐにやって来る。
 - (6) しかし、人々はそういう警告には耳を傾けなくて、平気で日常生活を送る。
 - (7) ノアの大洪水は、終末時代を生きる私たちへの警告。
3. 「ノアの救い」について
 - (1) 救いは、信仰により、恵みによって与えられる。
 - (2) 信仰の対象は、神。
 - (3) 信仰の内容は、時代によって異なる。
 - ①ノアの時代では、箱舟を造ってそこに入ること。
 - ②恵みの時代では、イエスが私たちの罪のために十字架で死に、墓に葬られ、3日目に甦ったことを信じること。

結論

1. 誰であっても、必ず罪を犯したり、失敗したりする。
2. 誰であっても、救いを必要としている。
3. 救われる方法は、いつの時代でも、信仰と恵みによってである。

創世記18 創世記10章1節～32節

「セム、ハム、ヤペテの歴史」

イントロ：

1. 前回までの復習
 - (1) 創世記には11の区分（トルドット）がある。
 - (2) ここから第4の区分が始まる（10：1～11：9）。
 - (3) 「セム、ハム、ヤペテの歴史」とは、ノアの息子たちのその後の広がりの説明である。
 - (4) 大洪水の前には、息子たちには子どもはいなかった。全員が洪水の後で生まれた。
 - (5) 人類は、ノアの3人の息子から広がった。

2. メッセージのアウトライン
 - (1) 創10章の概観
 - (2) ヤペテの系図
 - (3) ハムの系図
 - (4) セムの系図

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
 - (1) 第4の区分は、11章のバベルの塔の事件も含んでいる。
 - (2) 10章は、人類の一体性を教えている。
 - (3) 11章の前半は、民族間の対立を教えている。

このメッセージは、人類が抱える問題（対立と憎しみ）の原因を探り、その解決を模索するものである。

I. 創10章の概観（10：1）

1. 年の順番に解説があるわけではない。
 - (1) ヤペテ、ハム、セムの順番
 - (2) メシアの家系でないものから扱う。
 - (3) セムの家系が最後に出てくる。
2. 創10章が書かれた目的
 - (1) 神の摂理によって諸国が配置された。
 - (2) 配置する際の原則は、イスラエルと諸国との関係（申32：8～9）。

「いと高き方が、国々に、相続地を持たせ、人の子らを、振り当てられたとき、イスラ

エルの子らの数にしたがって、国々の民の境を決められた。主の割り当て分はご自分の民であるから、ヤコブは主の相続地である」

(3) 人類の一体性が教えられている。

3. この記録の歴史性

(1) I 歴1:4~23では、この内容がそのままコピーされている。

(2) ノアの系図は歴史的記述として理解された。

4. 区分の方法

(1) 地理的区分

(2) 言語的区分

(3) 部族的区分

(4) 民族的区分

5. 名前

(1) 個人名

(2) 町の名前

(3) 部族名

(4) 民族名

II. 10:2~5 ヤペテの系図(合計14の氏族)

1. ヤペテには7人の息子が生まれた。

2. その中で2人だけが取り上げられている。

(1) ゴメルには、3人の息子が生まれた。

(2) ヤワンには、4人の息子が生まれた。

3. 地理的広がり

「これらから海沿いの国々が分かれ出て、その地方により、氏族ごとに、それぞれ国々の国語があった」(5節)

(1) エーゲ海からカスピ海にかけて分布する。

(2) 彼らはさらに広がった。ヨーロッパ、ペルシャ、インド、アジアのほとんど。

(3) これは、創9:27の成就である。

(4) 「それぞれ国々の国語があった」

(これによって、この系図はバベルの塔以降に書かれたものであることが分かる)

III. 10:6~20 ハムの系図(合計30の氏族)

1. ハムには4人には息子が生まれた。

2. その中で3人だけが取り上げられている。クシュ、ミツライム、カナン。

3. クシュには、6人の息子が生まれた。

(1) その中で重要なのが6番目の息子のニムロデである。

(2) 名前の意味は、「反逆する」。後で与えられた名前であろう。

(3) 「地上で最初の権力者となった」

①訳文の比較 創10:9

【口語訳】 彼は主の前に力ある狩猟者であった。これから「主の前に力ある狩猟者ニムロデのごとし」ということわざが起った。

【新改訳改訂3】 彼は【主】のおかげで、力ある獵師になったので、「【主】のおかげで、力ある獵師ニムロデのようだ」と言われるようになった。

【新共同訳】 彼は、主の御前に勇敢な狩人であり、「主の御前に勇敢な狩人ニムロドのようだ」という言い方がある。

②原文の直訳は、「ヤハウエの顔の前に」

* 神に反逆する彼の姿が表現されている。邪悪な者。

* 彼は獣の狩猟者であるばかりか、人を狩る者ともなった。

* 「主の前に力ある狩猟者ニムロデのごとし」ということわざが生まれた。

③彼は、人類の歴史上、初めて王国を建てる者となった。

④シヌアル(バビロニア)

* 彼はバベルの塔事件の首謀者であろう。

* バビロン捕囚の種が蒔かれた。

⑤アシュル(アッシリヤ)

* 言葉の混乱以降に、アシュルに移動せざるを得なくなった。

* アッシリヤ捕囚の種が蒔かれた。

4. ミツライムには、7人の息子が生まれた。

(1) ミツライムとは、エジプトのことである。

5. カナンには11人の息子が生まれた。

(1) カナンはノアの預言によって呪われた民である。

(2) 彼らは、後にイスラエルを攻撃する民となる。

IV. 10:21~31 セムの系図(合計26の氏族)

1. 10章21節が重要

(1) 「エベル」とは、「ヘブル人」という言葉の語源。

(2) セム→エベル→ヘブル人と続く。

2. セムには5人の息子たちが生まれる。

3. その中で、アラムとアルパクシャデが取り上げられている。
4. アルパクシャデが重要。メシアの家系。
5. アルパクシャデとシェラフの間に、もう1人の人物が入る。
 - (1) ルカ3:35~36によれば、それはカイナンである。

「セルグの子、レウの子、ペレグの子、エベルの子、サラの子、カイナンの子、アルパクサデの子、セムの子、ノアの子、ラメクの子」

*アルパクシャデとシェラフ(サラ)の間にカイナンが入っている。

*70人訳聖書から取られている。
 - (2) シェラフ
 - (3) エバル。ヘブル人の父。
 - (4) エバルの2人の息子
 - ①ペレグ(分けるという意味)

「彼の時代に地が分けられたからである」。バベルの塔での言葉の混乱。
 - ②ヨクタン

*13人の息子たち(すべてアラビア人)
 - ③ペレグの子孫が書かれていないのは、それがメシアの系図であるから。

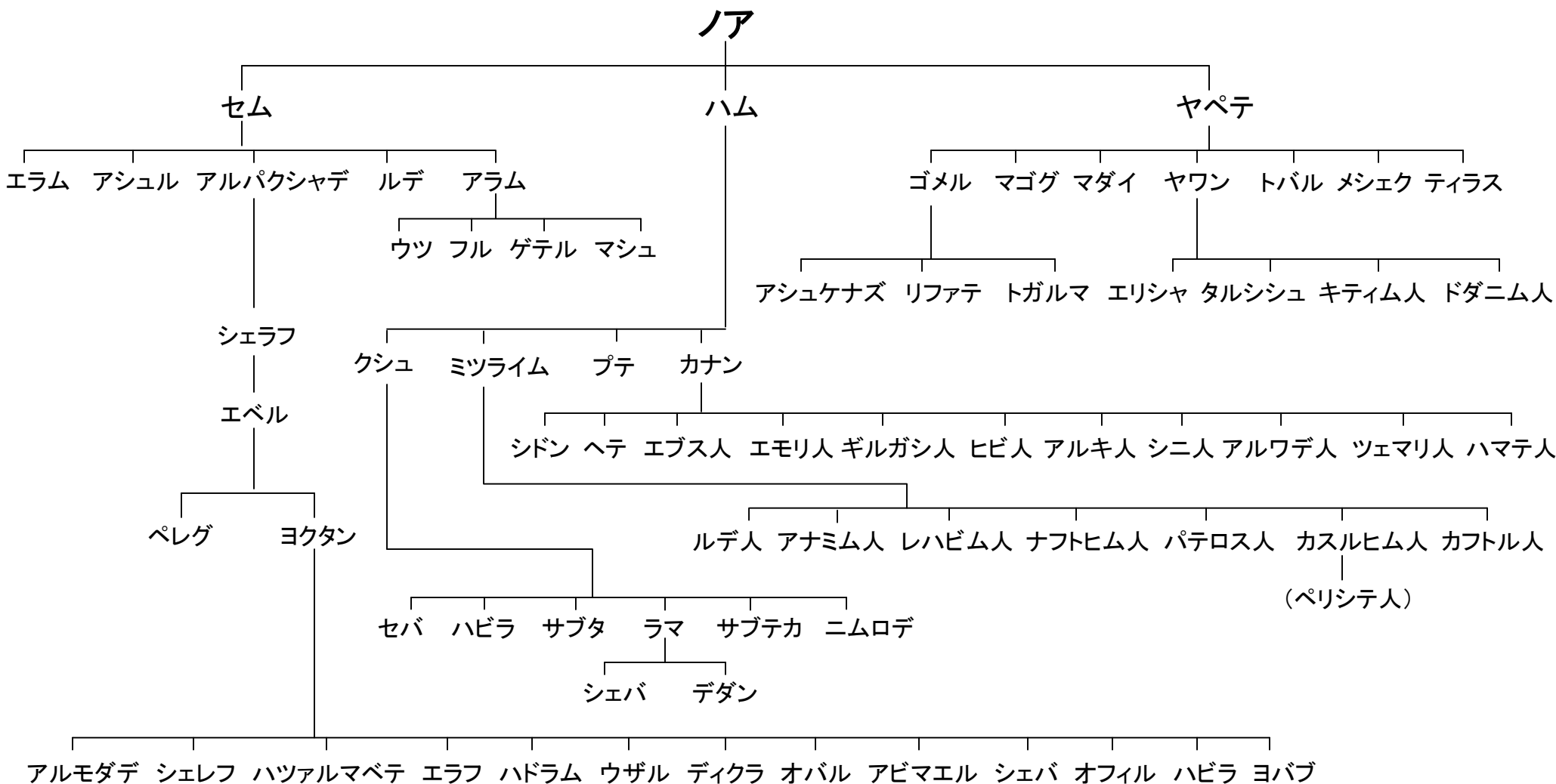
*創3:15の「女の子孫」の約束

結論

1. セム、ハム、ヤペテから70の部族(氏族)が出た。人類の統一性。
2. メシアの家系でないものから扱い、最後に本流を取り上げるという手法。
3. セムの家系、ペレグの家系からメシアが誕生する。
4. イスラエルの子らの数にしたがって、国々の民の地境が決められた。
5. 創10章は、人類の対立も描いている。その原因は、バベルの塔事件にある。
6. 聖書的歴史観が提示されている。
 - (1) 人類の問題の原因は、神への反抗である。その結果、対立が生まれてきた。
 - (2) アブラハムの選びは、創3:15の約束の延長線上にある。
 - (3) アブラハムの子孫として誕生するメシアは、神と人類の仲介者となる。
 - (4) 民族の和解に先立つのは、神との和解である。

(例話) メシアニック・ジューとアラブ人クリスチャンの和解運動

チャート3 ノアの系図



創世記19 創世記11章1節～9節

「バベルの塔」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 創世記には11の区分(トルドット)がある。
- (2) 前回と今回で、第4の区分が終わる(10:1～11:9)。
- (3) 創10章は、ノアの息子たちのその後の広がりの説明である。
- (4) きょうの箇所は、どのような原因で人類が広がったのかを説明している。
- (5) 再記述の法則について
 - ①創11:1～9は、創10章の状態がどのようにして起こったのかを記したものの。
 - ②つまり、時間的には創11:1～9の方が、創10章よりも先。
 - ③バベルの塔の事件は、ニムロデが指導者となって起こった神への反抗。
 - ④彼はバビロンで神に反抗しますが、後にアッシリヤに移動することになる。
 - ⑤この事件は、ペレグの時代に起こったことである(創10:25)。
- (6) ここには、創6章～8章と同様の「対象対句法」がある。
 - A 全地は一つのことば(1節)
 - B そこに(2節)
 - C 互いに(3節)
 - D さあ、れんがを作ってよく焼こう(Let us)(3節)。
 - E さあ、われわれは…建て(4節)
 - F 町と塔(4節)
 - G 主は、降りて来られた(5節)。
 - F 町と塔(5節)
 - E 人間の建てた(5節)
 - D さあ、混乱させ(Let us)(7節)
 - C 互いに(7節)
 - B そこから(8節)
 - A 主がことばを混乱させた(9節)。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 起：初めの状態
- (2) 承：人類の野望(神のようになろうとした)
- (3) 転：神の裁き(言葉の混乱)
- (4) 決：裁きの結果(各地への離散)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
 - (1) 歴史から学ぶ必要がある。
 - (2) 過去に起こったことは、再び起こる。
 - (3) 人類全体に起こったことは、個人にも起こる。

このメッセージは、私たちが歴史から学ぶ必要があることを教えようとするものである。

I. 起：初めの状態 (11：1～2)

1. この時代は、一つのことば (一つの唇)、一つの話しことば (同じ語彙)。
 - (1) 意思疎通が容易。
 - (2) そのことばとは、ヘブル語
2. その後の人類の移動。「そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した」
 - (1) 「東の方から移動して来て」という訳よりは、「東の方に移動して」の方がよい。
 - (2) アララテ地方 (今のアルメニア、トルコ) から、シヌアルの地へ移動。
 - (3) シヌアルの地とは、バビロンのこと
 - (4) そこには「平地」があった。
 - (5) 耕作に適した地を見つけたので、そこに定住した。
3. シヌアルの地は、人類の歴史が始まった場所 (エデンの園が置かれたあたり)。
 - (1) 人類はアダムから始まり、大洪水で滅ぼされた。
 - (2) 再びノアから新しい歴史を刻み始めていた。
 - (3) ノアの息子たちから出た人々は、人類の歴史が始まった「先祖たちの地」に帰還。
 - (4) 神は人類に、新しいチャンスを与えてくださった。
 - (5) 人類の責務は、そのチャンスを生かして地に広がり、神を称えること。
 - (6) しかし、人類は神の期待を裏切り、再び反抗の歴史を繰り返すことになる。
4. 私たちの責務とは。

Ⅱ コリ 6：2 「神は言われます。『わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた』。確かに、今は恵みの時、今は救いの日です」

II. 承：人類の野望 (神のようになろうとした) (11：3～4)

1. レンガの使用
 - (1) 人々は、石の代わりにレンガを作って、それをを用いるようになった。

- (2) 南メソポタミアでは、石が不足していた。
- (3) 粘土も不足していたので、モルタルの代わりに瀝青(アスファルト)を用いた。

2. 町と塔の建設(4節)

- (1) しばらくすると、彼らは町と塔を建てようとした。
- (2) 大洪水以前にも町はあった(創4:17)。
- (3) この箇所で言われている町とは、創10:10の町、バビロンのこと。
- (4) バビロンの意味は、「神の門」ということ。

3. 「天に届く塔」を建てようとした理由

- (1) 占星術のためである。
- (2) 彼らは、神の領域に届こうとした。
- (3) ここには、誤った宗教の原型がある。
- (4) 黙示録17:5は、バビロンが「誤った宗教の母」と教えている。

「その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、『すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン』という名であった」

- (5) この塔は、新しい宗教を創設する目的で建てられたもの。
- (6) その指導者であるニムロデは、バビロンの主神であるマルドゥクになった。
 - ①マルドゥクは、メロダクと言われる(エレ50:2)。
 - ②ベルとも呼ばれる(エレ50:2)。

4. 人々は、「名をあげよう」という野望を抱いた。

- (1) この野望もまた、大洪水の前から存在していた(創6:4)。
- (2) 野望は、人間主義、傲慢、プライドから出てくるもの。
- (3) これは、人間が抱く根本的な罪である。
- (4) 「われわれが全地に散らされるといけないから」
 - ①これは、ノア契約の違反(創9:1、7)。
 - ②人類が全地に広がることこそ、神の計画であった。
 - ③人々は、神が与える領土の区分に反抗し、自らそれを選ぼうとした。

5. 今も人類の根本的な問題は変わっていない。

- (1) 地上における戦争は、すべて土地の奪い合いに起因する。
- (2) 私たちの内には、神を押しつけ、自分の思い通りに生きようとする性質が宿っている。
- (3) 私たちは「ヤコブ(押しつける者)」である。
 - (4) 神との和解の中にこそ、真の平安と喜びとがある。

III. 転: 神の裁き(言葉の混乱)(11:5~7)

- 1. 擬人法で神の思いを表現している。風刺、皮肉。

- (1) 神は人類の状態に関心を持っておられる。
- (2) 人類は余りにも小さな存在である。
- (3) 人類がいかに高い塔を建てたとしても、神は、降りて来なければそれが見えない。

2. 神の評価

- (1) 一つの民
- (2) 一つのことば
- (3) これは反抗の始まりで、これからあらゆる種類の反抗が起こってくるであろう。
- (4) 神への反抗という根本的な問題の根が断ち切られる必要がある。

3. 神は2度目に降りて来られる。

- (1) 2度目は、裁きのために。
- (2) 主語は複数形。「Let us」。
 - ①三位一体の暗示
 - ②ユダヤ教のラビは、神が天使に語っていると解釈する。
- (3) 目的は、ことばの混乱をもたらすこと。
- (4) 4節で語っていることが、できなくなる。

IV. 結：裁きの結果（各地への離散）（11：8～9）

1. 主は人々を、地の全面に散らされた。

- (1) ここに、10章に書かれた人類の離散が起こった理由がある。
- (2) ニムロデも、アッシリヤに移動した。

2. 彼らは塔を完成させたが、町を建てるのはやめた。

- (1) 同じ言葉の人々が住むには、すでに十分な広さがあった。
- (2) 言葉の異なる人々は、他の場所に移動した。
- (3) 町に名前が付けられた。

①バベルとは、ヘブル語のバビロン。

②ここには、ことば遊びがある。

③同じ語幹の言葉に2つの意味がある。

*バベル (Bavel) 「散らす」という意味

*バビル (Babilu) 「神の門」という意味

④別の言葉。バラル (Balal) 「混乱させる」

⑤バベルという名前は、「神の門」が「混乱の門」になったことを示している。

3. 多種の言語が発生した。

- (1) 人類の傲慢を砕くためにこれが起こった。
- (2) ゼパ3：9では、メシア的王国での言葉の回復が預言されている。

「そのとき、わたしは、国々の民のくちびるを変えてきよくする。彼らはみな主の御名によって祈り、一つになって主に仕える」

結論

1. 歴史から学ぼう。
2. 過去に起こったことは、再び起こる。
 - (1) 米国発の金融危機は、世界を震撼させている。
 - (2) 文明史的に見れば、産業革命以来の近代化、拡大化路線が破綻している。
 - (3) 危急の課題は、エネルギー、地球環境、食の確保である。
 - (4) 現代版バベルの塔が破綻しつつあることを認め、神の前に謙遜になる必要がある。
3. 人類に起こったことは、個人にも起こる。
 - (1) 傲慢
 - (2) 神の声が聞こえなくなる。
 - (3) 人とのコミュニケーションが成り立たなくなる。
 - (4) 成功を求めたのに、混乱と破滅が襲ってくる。

創世記20 創世記11章10節～26節

「セムの歴史」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 創世記には11の区分（トルドット）がある。
- (2) きょうの箇所は、第5の区分「セムの歴史」である。
- (3) 無味乾燥に見えるが、非常に重要である。
- (4) 創5章のアダムの系図
 - ① アダムからノアまでの10代
 - ② ノアの3人の息子たちで終わっている。
 - ③ セム（メシアの系図）の甥のカナンに関する言及
- (5) 創11章のセムの系図
 - ① セムからアブラムまでの10代
 - ② テラの3人の息子で終わっている。
 - ③ アブラム（メシアの系図）の甥のロトに関する言及
- (6) 創5章と11章には、差異もある。
 - ① 「彼は死んだ」ということばが、11章にはない。
 - ② 寿命が短くなっている。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 注目すべき人物
- (2) 寿命の減少
- (3) 歴史の継承
- (4) アブラム登場の準備

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 聖書信仰の重要性
- (2) 聖書の信頼性
- (3) 聖書の読み方

このメッセージは、聖書の信頼性と聖書の読み方を教えようとするものである。

I. 注目すべき人物

1. 創10:21以降のセムの系図

- (1) セム→アルパクシャデ→シュラフ→エベル→2人の息子ペレグとヨクタン
- (2) ヨクタンには13人の息子が誕生した。
- (3) ペレグに関しての記述はなかった。
- (4) 彼がメシアの系図につながる人物であるため、一番最後に取り上げられる。
- (5) ペレグ→レウ→セルグ→ナホル→テラ→3人の息子アブラム、ナホル、ハラン

2. エベル

- (1) その名前の意味は、「渡る」、「過ぎる」、「境を越える」というもの。
- (2) エベルはヘブル人の先祖となる人物(創10:21参照)。
- (3) イスラエル人たちは他国人に自己紹介するときには、ヘブル人という呼称を用いた。
- (4) それには、「川向こうから来た民」という意味があったのだろう。

3. ペレグ

- (1) その名前の意味は「分ける」である。
- (2) 創10:25では、「彼の時代に地が分けられたからである」との説明があった。
- (3) バベルの塔事件以降の言葉の混乱とその結果についての言及。
- (4) ペレグは、バベルの塔事件と同じ時代に生きていた人物。

4. テラ

- (1) その名前の意味は、「月」である。
- (2) テラは、元は月神を礼拝する偶像礼拝者であった。
ヨシ24:2 「イスラエルの神、主はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラハムの父で、ナホルの父でもあるテラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた』」
- (3) カルデア人のウルは、月神礼拝の中心地であった。

II. 寿命の減少

1. 時代が下るに従って寿命が短くなっている。
2. セム(第1世代)とアルパクシャデ(第2世代)の間に見られる大幅な寿命の減少
 - (1) セムの寿命は600歳(100+500)。
 - (2) アルパクシャデの寿命は438歳(35+403)。
 - (3) 162歳の減少である。
 - (4) 大洪水以降の地球環境の激変があると思われる。
3. エベル(第4世代)とペレグ(第5世代)の間の寿命の減少
 - (1) エベルの寿命は464歳(34+430)。
 - (2) ペレグの寿命は239歳(30+209)。

(3) 225歳の減少である。

(4) この減少は、バベルの塔の裁き以降に起きている。

4. 年齢の減少は、神の裁きが影響していると思われる。

(1) 長寿もまた神の祝福のひとつですが、人類は罪の進展とともにその祝福を失う。

(2) 使徒ヨハネの祈り

「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります」(Ⅲヨハ2)

Ⅲ. 歴史の継承（伝承の継承）

1. 人類の初期の歴史は、どのようにして後の時代の人々に伝えられたのか。

2. 常識的には、「伝承」を疑いたくなる。

3. 創世記に書かれた年齢を詳細に調べてみると、リンクは3人しかいない。

(1) アダム

①初代のアダムは930歳で死んだが、それは9代目のレメクが56歳の時。

②アダムとレメクとは、生きた時代が56年間重なっていた。

(2) レメク

①9代目のレメクは1651年に777歳で死んだが、それは11代目のシェムが95歳の時。

②レメクとシェムとは、生きた時代が95年間重なっていた。

(3) セム

①11代目のセムは、2156年に600歳で死んだが、それは21代目のイサクが48歳の時。

②セムとイサクとは、生きた時代が48年間重なっていた。

4. アダムとイサクをリンクさせるためには、アダム、レメク、セムの3人で十分。

5. それ以外の驚くべき点

(1) ノアは、アブラムの父テラが128歳になるまで生きていた。

(2) セムとエベルは、テラよりも長生きしている。

(3) エベルは、アブラムよりも長生きしている。

6. 人類の初期の歴史の伝承には、何の問題もない。

(1) 主イエスは、旧約聖書の権威を認めた。

「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます」(マタ5:18)

(2) 聖書にどの程度の信頼性を置くかによって、その人の信仰の堅固さが決まる。

(3) 聖書は神のことばであり、神が語られたことは必ず成就すると信じた人は幸いである。

IV. アブラム登場の準備

1. 創11章の系図は、アブラムが登場するための準備であり、序曲である。
 - (1) イスラエルの民の歴史が始まるための準備である。
 - (2) 創11:27から第6の区分が始まる。それが「テラの歴史」。
 - (3) そのトルドット（区分）は非常に長くて、創25:11まで続く。
2. これまでに人類は3度試されてきた。
 - (1) エデンの園で、アダムが試された。
 - (2) 大洪水で、ノアとその時代の人々が試された。
 - (3) バベルでは、人類がノア契約に忠実であるかどうかを試された。
3. しかし、人類は以上の3つの試みにおいてすべて失敗してきた。
4. 人類は新しい方向性を必要としていた。
5. 第6の区分（創11:27以降）に入ると、創世記の内容は大きく変わる。
 - (1) 全人類の歴史から、ある特定の民族の歴史へと移行する。
 - (2) 多くの土地から、ひとつの土地へと移行する。
 - (3) アブラムの選びをきっかけとして、その移行が起こる。

結論

1. 聖書信仰の重要性を認識する。
2. 創世記1章～11章は、全人類の歴史を記録している。
 - (1) 聖書の救いは、すべての民族、個人に向けられている。
3. 創世記12章以降では、聖書は極めてヘブル的な書となる。
 - (1) 全人類を救うためにアブラムが選ばれたがゆえに、そのような記述法になる。
 - (2) ヘブル的視点から読まなければ聖書を十分に理解することはできない。
4. 神が啓示された真理を神の方法で理解し、その真理の上に人生を打ち立てる。

チャート4 セムの家系の年数一覧表

名 前	誕生の年	息子誕生の 時の年令	息子誕生 以降の年数	死亡 年令	死亡の年
セム	1 5 5 6	1 0 0	5 0 0	6 0 0	2 1 5 6
アルパクシャデ	1 6 5 8	3 5	4 0 3	4 3 8	2 0 9 6
シェラフ	1 6 9 3	3 0	4 0 3	4 3 3	2 1 2 6
エベル	1 7 2 3	3 4	4 3 0	4 6 4	2 1 8 7
ペレグ	1 7 5 7	3 0	2 0 9	2 3 9	1 9 9 6
レウ	1 7 8 7	3 2	2 0 7	2 3 9	2 0 2 6
セルグ	1 8 1 9	3 0	2 0 0	2 3 0	2 0 4 9
ナホル	1 8 4 9	2 9	1 1 9	1 4 8	1 9 9 7
テラ	1 8 7 8	1 3 0	1 3 5	2 0 5	2 0 8 3
アブラハム	2 0 0 8	1 0 0	7 5	1 7 5	2 1 8 3
イサク	2 1 0 8	6 0	1 2 0	1 8 0	2 2 8 8
ヤコブ	2 1 0 8 (2 1 6 8)			1 3 0	2 2 3 8 (2 2 9 8)